

第6回名桜文学賞受賞作品集



第六回 名桜文学賞受賞作品集

第六回名桜文学賞受賞作品集 目次

小説部門

最優秀賞 芋家族

奨励賞 三人娘譚

奨励賞 恋敵(ライバル)

深緑の和解と友好編

田中 直次／1
高柴 三聞／26

寺山修司／48

詩部門

最優秀賞 水平線を睨んだ日

奨励賞 祈りの架け橋

奨励賞 青年の心象スケッチ

沢口リリキ／89
花木 詩香／93
Φ(ふあい)／97

短歌部門

最優秀賞 該当作品なし

奨励賞 なんの未練も

奨励賞 大き背

奨励賞 ダバオの暮し

奨励賞 出た杭

森山 高史／101
高良 鳴海／102
安仁屋 升子／103
ななみ／104

エッセイ部門

最優秀賞 基隆体験記

上原 愛音／105

俳句部門

最優秀賞

ニライカナイ

奨励賞

蓮魂譜（れんこんふ）

奨励賞

地球一輪

奨励賞

明鏡止水

津嘉山

典／113

琴森

戀／114

友利

正／115

玉那覇

尚／116

琉歌部門

最優秀賞

過れし面影

奨励賞

斗搔ぬ御祝

奨励賞

親ゆ偲ぶ

奨励賞

思里の匂

前原

武光／117

あさと

愛子／119

大城

和子／121

比嘉

道子／123

選評

小説部門

小嶋

洋輔／125

詩部

西原

裕美／137

短歌部門

久保まり子／140

エッセイ部門

小嶋洋輔／144

俳句部門

おおしろ建／149

琉歌部門

波照間永吉／152

赤星十四三／134

玉代勢

章／130

小番

達／174

照屋

理／155

表紙

『あけの海』

原画 デザイン
ステンドグラス製作

帆足デザイン研究所
沖縄ステンドグラス

小説部門

最優秀賞

芋家族

田中 直次／1

奨励賞

三人娘譚

高柴 三聞／26

恋敵（ライバル）

深緑の和解と友好編

キヤリンバレンティンハート

／48

*

*

小説部門

最優秀賞

芋家族

田中 直次

真栄城稔まえしろみのるは気だるい疲労感を体中からだじゅうに溜めハンドルを握る。夜勤専属のタクシー乗務員になつて五年が過ぎた。

新型コロナウイルスという感染症が影響し飲食街に行く客が激減した。それでも生活のために、街中へ客を求めて惰性でタクシーを走らせた。

見慣れた沖縄市の街並みはめつきり活気がなくなり、消費者は大型スーパーで買物をし、米兵が集中するバー街も人はまばらだ。ベトナム戦争の頃は、兵士で溢れた街だった。

ドルの札束は住民の生活を潤したが、あぶく銭は瞬く間に消えた。ベトナム戦争が終わると死んだような街になった。それでも週末は米兵相手のバーだけは繁盛している。バーの前ではホステスが米兵に絡みついている。

地元の人が利用する商店街も空店舗が増えた。「貸店舗求む」の看板が至る所にあり、新たな

借主も現れないまま何年も眠り続けている。

稔はタクシー乗務員として客が少ないことに不安が増した。不景気の上に新型コロナという病魔はタクシー労働者に堪えた。かと言って自分にできることは、タクシーを流して客を探すことだった。タクシーの振動に揺られ腰痛の腰を擦る。シートベルトに締め付けられ、はみ出た腹を左手で掴む。

稔には七十歳を過ぎた母がいて、稔にタクシーを辞めて畑の手伝いをして欲しいと懇願した。

「稔よー、タクシーや儲もろからんさに、早く辞やみやーに畑はたきんかい来ーわ（タクシーは儲もろからないでしょ。早く辞めて畑に来なさい）」と、皺の口を尖らす。

「ハッシエお母かよー、タクシーやーすぐねー辞やみらんろー（お母かよー、タクシーはすぐに辞められないよ）」と、煙に巻くが、タクシー乗務員を辞めるのも時間の問題だと思っていた。

母のヤスは最近、体が思うように動かないと言う。

「稔よー、私わんや永くねーんどー。分わかとりるやー（私は永くないみたい。分かてるねー）」と言う、母の言葉が頭から離れないのであった。

稔は人の後ろ姿を追ってタクシーを走らせる。タクシー乗務員はスーパーやパチンコ店前で客待ちして乗せるか、流して拾うかのパターンが多い。

陽が落ち十時ごろになると中の町のバー街を流す。スナックのネオンが煌々と誘惑の灯りを点

す。数珠繋ぎの何十台ものタクシーが前方後方でダラダラと走る。空車を示す社名の入った車上のタツプランプが提灯のように揺れる。

稔は千鳥足で歩く、酒に溺れた獲物を狙う。誰のタクシーに手を挙げる分らない運にまかせてホステスは肌をさらけ出し、真つ赤な口紅で生活の対象に欲望の笑みを投げる。若いホステスから厚い化粧で覆われた年齢の判別がつかないホステスまで、必死に獲物を追いかけて、徘徊する客にまわりつく。

ホステスの客を探す目は金にしか見えない。若い男のキャッチャーも残り少なくなった客の財布を狙う。

稔には妻の恵子と中学二年の由美、小学五年の悠也、小学一年の涼太の三人の子供がいる。それと母のヤスが同居している。稔はタクシー乗務員で恵子はスナックで働いていて、三人の子供はヤスに見てもらっている。

稔は夕食のため、恵子の働く中の町にあるスナックゆいのドアを開けた。

「あい、今日や早さんや^{ちゆう}ー」と、母親譲りの方言で話す。恵子の目が笑っている。

恵子はホステスとして週に三日、スナックで働いている。

「夕晩願^{ゆうばんげん}ーさびら」と、声を掛けカウンターの端に座った。

「準備なとーんろー」

恵子は野菜炒めを温めた。稔は野菜炒めを食べながら、

「恵子、俺達会社や、なー終いやっさー」

「コロナし客ぬ居らんるやー」

稔は箸で野菜炒めを突いた。

「あんし、ちゃーすが（それで、どうするかだ）」

「実よー、お母ーぬ調子悪つさんり。今すぐ、ちゃーないんちえーねーんしが（母は調子が悪いらしい。今すぐ、どうなるということではないらしいが）」

「アイエー、大変あらんなー」

「お母ーぬ畑や芋畑やし、今、収穫時期し、お母ーぬ、タクシー駄目やらー、畑さんなり電

話あたらんろー」

「ふーん、芋畑な」

稔は腕組みして、埃をかぶったスナックの照明を見つめる。

「稔よー。実よー、うぬスナックん閉みーんりよー（このスナックも閉めるらしい）」

「アイエナー、俺達は終わるかー」

「わったーの話、くりんかい賭きーしかねーんさーやー（芋畑に賭けるしかないね）」

「芋なー。俺や、畑しちえーんらんしが（俺は畑やったことないよ）」

スナックの客は一人だけで、カラオケの画面にがなり立てている。

稔は会社に辞表を出した。担当課長は「残念だな」と言ったが、目は笑っている。売り上げの低い稔が辞めることに会社は痛くも痒くもなかった。

母の畑の芋葛が風で揺れている。

太陽の光で葛がキラキラ光る。その土の下に芋が実っているはずだ。稔はワクワクした。早く掘り出し芋を見たい。母が栽培している芋は黄金芋と紅芋だった。稔は早速、芋畑作業の準備に入ったが、何から手を付けていいか分からない。芋畑は数ヶ所に点在し千坪もあった。芋葛の植え付け段階の畑が数畝ある。芋が収穫できる畑は、畝に生えた雑草を草刈り機で刈り取る作業がある。

「稔よー、芋作いし大事やしえー土ろー（芋作りで大事なのは土だよ）」と、口達者な母が目を光らす。

「稔よー、うぬ土ーぬーんりいいが分かいい（この土は何と言うか分かるか）」

「いえ、分かりびらん」

「うぬ土ージャーガルりん酸性ぬ土ろ（この土はジャーガルという酸性の土だ）」と、母は土を手の平に乗せ揉んでいる。

「うん、悪くおーねーん土ろー。やしが固さんやー。手加りーん必要があんろー（悪くない土だ。しかし固いな。手を加える必要があるね）」

「手加れるんですか」

稔にはさっぱり分からなかった。

「明日からー土作いろー。しむんなー」と、ヤスは広大な土地を眺める。

ヤスは大規模に芋を収穫しようと、甥の比嘉忠雄にトラクターの操作をお願いしていた。

「ヤスオバー、ちゃー頑丈やんなー」と、背後から声がする。

ヤスは振り返り、

「あい、大城さん。ちゃーさが（どうしたの）」

稔は大城を見て棒立ちになった。大城は七十を過ぎた老人で、米軍人の着る迷彩服を着ている。沖繩の畑人は、この迷彩服で畑作業をしている人も多い。

「あぬよー、ヤスオバーが宮城島んでい芋作いそーんり聞ちやーに來どー（ヤスオバーが宮城島で芋作りしていると聞いて來たよ）」

ヤスは稔に大城を紹介した。

「君がヤスオバーの長男かー」と、齒が抜けた口を開け、赤ら顔で笑っている。

「はい、稔です」と、ペコリと頭を下げた。

「稔君、私知らんばーい」

「いえ、お母ーから名前は聞いています」

「俺が有名な大城進だ」

「有名？」

「去年ぬやまうむ勝負のとき、山城一郎君を優勝しみたせー俺ろー」

ー稔はやまうむ勝負のことは母から聞いていた。

「酒じようぶーの大城さんですね」

「バカモノ、先生と呼びなさい、先生と。今日俺が来せー、土作い教しが来ろー」

稔はやスの顔を見たが、知らんふりを決め込んでいる。

「土作りですか。それはお母ーから教わっています」

大城は「ふーん」と言つて、土を触った。

「稔君、うぬ土しえー上等芋作らんどー（この土では上等な芋は作れないな）」

「どうしてですか」

「バカモノ、土ぬよー固さんろー」

大城は何かにつけバカモノと言う。大城は煙草を啜えながら、

「そこでだ、俺が君んかい教しが来ろー。土作いに灰使いん話聞ちやるやー（俺が君に教えに来たんだ。土作りに灰を使う話を聞いたか）」と言つて、話し始めた。

「君や灰、分かいみ、灰」

「ハイ？、ですか。煙草の灰ですか」

大城の吸う煙草の灰が落ちるのを見て答えた。

「フリムン、煙草ぬ灰、芋かい掻きていちゃーすが。火山灰よー（煙草の灰、芋に掻けてどうする）」と、怒っている。

「桜島ぬ火山灰てー」

「あーそうでしたね。お母ーから聞きました。桜島の火山灰を土に混ぜるのですよね」

「やんろー。分か^わとーせー」と、大城は無然とした。

「芋にも効き目がありますかね」と、稔が素朴な質問をした。

「フリムン、やまうむと芋^{うも}、兄弟^{ちやうだい}ろーや。俺^わむん畑^{はたけ}し実験^{じくみ}済^{しま}ろー」

稔は半信半疑だつたがうなずいた。

「やしがやー、今^{こん}度^ど、桜島の火山灰^{ばい}準備^{びんび}ならんたぐとう、電力ぬ灰^{ちか}使^{つか}らやー（だけど、今度は桜島の火山灰^{ばい}が準備^{びんび}できなかつたから、電力の灰^{ばい}を使うよ）」

電力の灰は化石燃料を燃やしたものだつた。

「ところで稔君、うぬ畑^{はたけ}地^ち、天地返^{てんちげ}ししえーんなー」と、大城は土を触った。

天地返^{てんちげ}しとは、土壤の除去や土壤の健康改善を目的として、汚染されている深さまで土壤を掘削して下層の土と入れ替える作業である。

「分かりません」

「何、分かりましえん、ん、分かりましえんしえー、済^{しま}さらんろー。うりしえーいい土^{んちや}は作^{ちやく}らんやー」

大城は土を握り、

「稔よー、土地^じや水捌^{みじはき}ぬ大事^{だいじ}ろー。分か^わいんなー。やつぱり灰混^{まじ}らんねー駄目^{だみ}ろー。水捌^{みじはき}ぬ悪^{わる}さいねー水腐^{みじくさ}いすんろー。葉撒^{くすい}ちなー（土地は水捌^{みじはき}けが大事^{だいじ}だぞ。分かるか。やはり灰を混ぜないと駄目だ。水捌^{みじはき}けが悪いと芋^{うも}が水腐^{みじくさ}れするぞ。葉撒^{くすい}いたか」と、大城は稔を君付けから呼び捨てにした。

「はい、散布しました」と、稔は神妙に答えた。

「うりとうよー、イモゾウムシ対策ぬ葉撒ちなー」と、大城は念押しする。

イモゾウムシはカリブ島しよ原産で、一九四七年頃に沖縄で見つかつて以来、沖縄県と奄美群島の全域に侵入した侵略的外来生物であつた。イモゾウムシの姿が像に似ているのでその名が付いた。

大城は、「今度教さやー」と言つて、突然「アンシエーヤー（それでは）」と歸つて行く。

稔は拍子抜けした。泡盛でも要求されるのかと心配したが、大城が何もねだらなかつたことに首を傾げた。

—これは変だ。何かあるぞ。

大城の後ろ姿はズボンのベルトにタオルを垂らしヨタヨタと歩いている。

夕食のある日。

食卓にヤスの畑で収穫した芋料理が並んでいる。芋料理と言つても、恵子を作るのは芋入り野菜炒めと、芋を角切りした炊き込みご飯。蒸かした芋を輪切りにする程度だつた。

稔はとても料理とは言えないと、恵子に言えなかつた。

「お母ーさん、今日も芋かー」

小学五年の悠也が叫ぶ。

「我慢、我慢。暫らくの我慢だ」

「何、言ってるお父ーさん、暫らくの我慢って、もうずっと芋だよ」と、悠也は口を尖らす。

「悠也君、明日はお肉も入れるからね」と、恵子がなだめた。

「芋料理にお肉。いやだ、いやだ」と、悠也は反発する。

「野菜炒めもあるじゃないか。ハッセ、この炊き込みご飯美味しいな」と、稔は悠也を見る。自分でも大人げないと思ったが、稔はやり返した。

「野菜炒めも殆んど芋じゃない。これじゃ、芋炒めだよ」と、悠也はまたまた口答える。

「コロナだ。コロナのせいだ。父ーちゃんのせいじゃない。恨むならコロナを恨め」と、稔は芋を口に放り込み、「うまい」と、悠也を見る。それを聞いていた恵子がクスツと笑った。

稔は悠也との会話を心を痛めていた。確かに芋を主食とした生活がずっと続いている。

「悠也、喜べ。次の日曜日、芋掘りができるぞ」と、稔は悠也を誘った。

「お父ーさん俺いやだよ。芋掘りなんて。野球の練習があるんだ」

「何言ってる悠也、生活のためだぞ」

稔はまたまた大人げないことを口にした。

それを聞いていたヤスが、

「稔よー、君^{いゃー}ん童^{わらび}とー。励^{はま}やーに肉食^{ししかま}せー（君は子供だ。励んで肉を食べさせなさい）」と叱った。

「アイエナー、お母^かー済みません」と、悠也に野球の続きを話す。

「野球は明日の日曜日は休みだろ」

悠也は何も答えられなかった。

「でも、いやだよ」

「悠也君。私が美味しい弁当作るよ」と、恵子が誘惑した。

爽やかに晴れた日曜日。

稔はトラクターの使い方を忠雄叔父さんに教えて貰った。

「稔ー、今日は土作りのためにトラクターの練習だ。自走で畑まで行くぞ」

「はい」

忠雄叔父さんは慣れた操作でトラクターを運転し農道を走る。稔は錆びだらけのボロボロの軽自動車でトラクターの後を着いて行く。農家の知り合いが手を振っている。

畑に着くと、稔は忠雄叔父さんからトラクターの使い方習った。

稔は芋葛いもかずらを植え付ける作業に取り掛かる。葛を刈る作業から始めなければならない。雑草を刈り取り、葛を刈りやすい状態にする。葛を切るハサミを手持った。忠雄叔父さんが手本を見せた。「いいか。太い葛から切るように。葛は何本もあるからな。一つの茎から四、五本採るのがベターだ」

忠雄叔父さんは慣れた手付きでハサミで葛を刈り、籠に入れていく。

「どうだ。分ったか。やってみろ」と、稔に促した。

トラクターで耕した畑に畝を作るのは忠雄叔父さんの仕事だった。あらかじめ刈り取ってあった葛を植える。百メートルある畝は二十畝もあった。畝に黄金芋と紅芋の葛を置いていく。一畝

に約二百株の葛を置く。株間は三十センチで置いた葛を土に埋め込む。鉄製の刺し棒を使って葛を植え込んでいくが、それが面白いように土の中にスーツと入っていく。

稔が畑で葛の植え付けをしていると、

「ちゃー頑張^{がんば}やさーやー」と声がする。いつの間にか大城が仁王立ちで背後に立っていた。しかし、背は小さくずんぐりしていて迫力はない。

「おかげさまで、頑張^{がんば}つています」

「稔よー、くぬ前^{まへ}ぬ電力ぬ灰ぬ効果やちゃーやたが」

「大城先生、効果が出るのはまだ早いのではないですか。あれから一ヶ月しか経っていませんよ」

「あい、やたんやー。俺^{わに}ん近頃^{ちかごろ}ブキていちょーつさー」と、頭を振る。

「ところで稔よー、いい話^{はなし}ちやつさー」

「へー、どんな話ですか」

「聞^{きこ}んなー」と、酒臭い顔を近づけてきた。

「お願いします。大城先生」

大城は先生と呼ばれて赤い顔を崩した。

「よしよし、あぬよーサトウキビぬバガス分^わかいみー」

「馬鹿す？私は馬鹿ではありませんよ」と、稔は顔を真っ赤にした。

「馬鹿あらん。バガスよバ・ガ・ス。サトウキビぬ搾^{しぼ}い粕^かーよー」と、自信顔になった。

「済みません。搾り粕ですか」

「土んかいバガス混じーねー、上等りいいいっさー」と、大城は畑の土を手にかけている。

バガスとはサトウキビの搾り粕の残渣のことで、バガスを活用して有機肥料作りの原材料とする他、紙、燃料、食品、飼料などに幅広く活用されている。

恵子は朝から悠也の野球の試合のために料理を作った。稔家族の楽しみは、悠也の野球の試合観戦であった。特にヤスは張り切るのであった。

悠也は少年野球チームの中心打者で、監督は足が速く、バッティングの上手な悠也を一番打者にした。

試合は悠也チームの先行で始まった。一番打者の悠也に期待がかかる。

悠也が打席に入ると、ヤスが、

「飛ばせー飛ばせー、悠也ー（飛ばせ飛ばせ）」と、声援を送る。

「とー、悠也が打ちゅんろー打ちゅんろー（打つよ打つよ）」と、周りのことなど気にせず大声を張り上げる。

「悠也君、バッティングも守備も上手だよ」と、観戦している母親たちがヤスに声を掛ける。

ヤスは、「ハッセ、悠也ー打ちゅんろー」と、拳を振り上げる。

稔と恵子には自慢の息子であった。

悠也は、初球はスイングしなかったがストライク。2球目はボール。

「とう、次ろー、打ちゅんろー」と、ヤスは悠也を見つめる。

悠也が3球目のストレートのボールを思いっきり振ると、ボールはセンターの頭上を越えた。俊足の悠也がベースを駆ける。ボールが外野を転々とする中、悠也は二塁、三塁へと走る。

「悠也ー、走れー走れー」と、ヤスの声援はヒートアップする。

悠也がホームベースに滑り込んだ。スタンドから歓声が沸く。審判が「セーフ」と両手を横に広げた。

「シタイヒャー悠也ー（やったぞ悠也）」

ヤスは歓喜し皺の顔が伸びている。

試合が終わり昼ご飯になった。恵子の作った弁当が広げられた。悠也は少し不安だったが、「お母ーさん、今日は芋料理少ないね」

「悠也ー、食めー食めー」と、ヤスが皿一杯に料理を盛った。

恵子が、「今日はお肉中心の弁当です。でもやっぱり芋もあります」と、みんなを笑わせる。

家族総出の芋収穫の日。

生育し収穫できる芋畑に行き、収穫作業をする。作業は分担し芋を掘り出すグループ。掘り出した芋を集めるグループ。集めた芋の土を落とし、収穫ケースに入れるグループに分かれる。

芋を掘り出す担当は忠雄叔父さんで、芋掘り機で土を抉っていく。芋掘り機の「カタカタカタ」という音とともに、面白いように土の中から鈴なりの芋が土から飛び出す。

「ビール瓶サイズの芋だー」と、由美が特大の芋を持ち上げる。

「見て見て、ピンポン玉サイズもあるよー」と、涼太が両手いっぱい芋を抱えている。芋は長く二十センチくらいのふつくらした形がベストだが、中には面白い形もある。

子どもたちは、

「オーッ、この芋、へびに似てるぞー、これは玉ねぎ型だー」と、声を張り上げ芋を眺める。子供たちの歓声が畑に木霊する。

土を落とした芋を収穫ケースに入れていく。畑には野鼠がいて、芋を集めているときに野鼠を見つけた子供たちが、「キヤー」と悲鳴を上げる。

「ワーツ、可愛い。鼠の赤ちゃんだー」と、赤ちゃん鼠の回りに集まる。

芋が収穫ケース一杯になった。ケースが五ケース、十ケースと積み上げられていく。一ケースに二十キロ入るので、十ケースだと二百キロになる。

「オーッ、今日は大収穫だ」と、稔が目を細める。

昼ご飯は恵子で作った料理を晴天の下で食べた。

油みそと梅入りのおにぎりが並ぶ。チキンフライにサラダと、子供たちの好きな卵焼きだ。

芋の売り上げ収入も増えて、恵子の料理メニューが増えた。

「お母ーさん、今日は芋料理ないからいいなー」と、悠也が喜ぶ。

「残念でした。わが家の自慢料理は芋料理です」と、恵子は風呂敷から芋料理の詰まった包みを取り出した。

「やっぱりお母^かだね」と、稔が笑っている。

収穫した芋は家に持ち帰り、販売店に出す作業がある。芋を洗い乾かし、芋のヒゲを取り除く。その後、計りにかけ一キログラムにして袋に詰める。

「童^{わらわ}ちやー皆^{みな}集まれー」と、ヤスが手招きした。子供たちが近寄ってきて、

「ヤスオバー何かー」と、口々に叫んでいる。手に手に芋を持っている。

「トオー、皆^{みな}、今日^{けふ}やオバーが芋の話^{はなし}をしますよ」

子供たちはキョトンとしている。

涼太はヤスの膝の上に乗って、「ヤスオバー、早く早く」と催促した。

アンシェー（それでは）と、ヤスは学校の先生気取りで始めた。

「芋は中国から来ました。芋を沖縄^{おきなわ}に持ってきたのは野国^{のくに}総監^{そうかん}という人です」

「そうかい、そうかい」と、涼太がヤスの膝の上で叫ぶ。

「違います。そうかんです」と、ヤスは涼太の頭をなでた。

「昔、中国のことを唐^{とう}と呼んでいたので、唐芋^{とういも}とも呼んでいました」

ヤスは竹籠^{たけかご}から包みを取り出した。

「ヤスオバー、何、何なの」と、由美が籠の中を覗き込む。ヤスはへ、へ、へと笑ってこぼし大の包みを二つずつ渡した。

「ヤスオバー、何かー、開けていいかー」と、涼太がヤスの皺^{しわ}の顔を覗く。

ヤスはにつこり笑って、「しむんろー（いいよー）」と答える。

「ヤッターヤッター」と、子供たちが小躍りしている。

「ヤスオバー、この芋、黄色いよ」と、悠也が目を丸くする。

「私のは紫色だけどー」と、由美が芋を見せる。

「はい、はい。黄色いのはね、さつま芋の種類でね、黄金芋と呼んでいるよ。紫色しているのは紅芋と呼んでいるさー」と、小さな目を細める。

「ヤスオバー、食べていいかー」

「うん、食めー食めー」

「ねーヤスオバー、芋もつとあるねー」

「あんどーあんどー（あるよ、あるよ）」と、竹籠から次々と芋の包みを取り出した。

子供たちは畑に座り、無心に芋をかじっている。

ヤスが、「美味しいかー、まーさんなー」と声を掛けると、

「まーさんまーさん」と、子供たちは満面の笑みで答えた。

ある日、芋作りをしている幼友達達の稲嶺穀が血相を変えてやって来た。

「稔よー、俺や大城かい騙さったっさー」

穀は泣き顔になっている。

「ぬーがぬーんち（どういうことだ）」

「半年めーによー大城が来に、サトウキビかいバガス混じーねー、芋ぬ大がーないんり言いたくとう混じたんよー（半年前に大城が来て、サトウキビにバガス混ぜたら、芋が大きくなると言うから混ぜたんだ）」

「あんし、ちゃーあなたが（それでどうなった）」

「うりがよー、最近、芋掘たぐとうよー、鼠ぬ食とうたんでー」

「あんし、芋ちゃーさが（芋はどうした）」

「ハツシエ、全部捨てたんでー。俺や大城ー許るさんろー」

穀は泣き顔から怒り顔になった。

そう言えば、稔は自分の畑も荒らされていたことを思い出した。

「お母ゆよ、うぬ近くんかい芋盗るーぬ居っさー（この近くに芋泥棒がいるよ）」と、稔が畑を指さした。

「二メートルくらい荒らさつとーさー」

ヤスが、「隣ぬ畑人るやがやー」と言つたときに、稔の脳裏に浮かんだのは大城だった。もしかして大城かもと。

先日、大城に会つたときの態度がそわそわしていたのを思い出した。

稔は収穫し、袋詰めした芋を販売店へ搬入する。芋を入れた収穫ケースは二つで、黄金芋と紅芋だ。

稔が棚に芋を並べていると、

「へい、稔ー」と、背後からダミ声がある。稔はどこかで聞いた声だと振り向くと、そこに大城が立っている。

「なんで大城がここにと不安がよぎる。」

「あい、大城さん、どうしたんですか」

「どうしたーあらん。君芋見いが来ろー」

体から酒の匂いがプンプンする。

「俺が教ちあん通い電力の灰、土んかい混ていなー（俺が教えた通り電力の灰を土に混ぜたか）」

「はい、言われた通り混ぜました」

大城は、「やんなー（そうか）」とニンマリし、いきなり黄金芋の袋をケースから抜き取り、破って芋を取り出し、監察官のように確かめている。芋を二つに割り匂いを嗅いでいる。クンクンと鼻をならし、

「稔よー、いい状態やしえー。いい匂じゃそーんろー」と、大城は感心している。

「あ、そうですか。大城先生のお陰です」

「やるやーやるやー（だろうだろう）」と言つて、酒焼けの顔を崩した。

手には残りの黄金芋の袋を握っている。

「稔よー、うぬ黄金芋貰ていいちゅんろー。芋栽培の講師料しや。ハ、ハ、ハ、ハ（この黄金芋は貰っていくぞ。芋栽培の講師料としてな）」と、販売店内に響く大きな声で笑い飛ばした。

稔は大城の強引さに抵抗できなかった。

大城は、もう一方の手に古酒クニスの三合瓶を持っている。

「お酒買うんですか。好きですね」

「バカマン、うぬ酒さきん講師料いやー。君い払りようやー（この酒も講師料だ。君が払いなさい）」と、大城は怒っている。

稔はヤスから、大城には気を付けなさいという意味を悟った。大城はしたたかだった。大城の生き方はまるで古酒クニスのようだと。

「ところで大城先生、毅にバガスを勧めましたよね」

「いい、勧めたんろー」

「芋が鼠に食べられていたそうですよ」

「あぬフリムンや、俺わんやバガス充分乾かーかさーに、糖分、完全に抜ぬちから使ちりよーりい言いちやしが」と、悪えんびれた様子もない。

大城は、「鼠えんちゅんまーさてーんてー」と、他人事のようにガハハハと笑っている。

悠也の誕生日。

「では、今日は悠也の誕生日です」と、涼太が自慢顔で話す。

「ジャジャジャ、ジャーン」と、涼太が台所からお膳に乗せた料理を運んできた。恵子も続けて

運んだ。次々とお膳を畳間に運ぶ。

「何、何、この料理」と、悠也は叫んだ。

稔は今日の料理の内容は知らされていなかった。

涼太が、「それでは、料理のメニューをお母ーさんが説明します」

恵子は悠也の誕生日ために料理教室に通い芋料理を習った。

「えっ、芋、芋料理」と、悠也は戸惑った。

「それではお母ーさんお願いします」

「はいはい、説明しますよ」と、恵子が緊張した顔になった。

「お善に乗っている料理は七品です」

悠也は料理の数を数えた。

「ほんとだ。七つもあるよ」と、悠也は喜んだ。

「この料理は全部芋で作ってあるんだよねーお母ーさん」と、涼太が得意げに話す。

「えっ、全部芋料理」と、稔はお膳の料理を見つめる。

「パンパカパーン、ではお母ーさんどうぞ」と、涼太が母を促す。

「一品目は、前菜の黄金芋と飾り野菜のサラダです」

「母ーちゃんすごい」と、稔が目を丸くする。

恵子が稔に食べてから、すごいと言って下さいと言うと、皆が爆笑した。

次に、「黄金芋とトーフのヘルシー巻です。そして、紅芋コロッケ、黄金芋のピーナツ和え、

紅芋の梅入りご飯、芋のお汁。最後は、お菓子の三色うず巻き餅です」

恵子は満足顔になっている。

大城は穀の畑に向いた。

「穀ーよー、芋^{づち}ちゃーなとーが（芋はどうなっているか）」と、畑仕事をしている穀の背中に声を掛けた。

「あい、大城先生、何ですか」

「何ですかーあらん。君^いむん芋^う鼠^{ひえんちゆ}んかい食^くとうたんりやー（君の芋が鼠に食べられたらしいな）」

「だからよー、大城先生」と、穀は不満顔になった。

「君^いやバガスの糖分、全部^{むる}抜^ぬかんたるやー。バカムン」

「いえ、大城先生抜いたつもりですが」

「何、つもり？バカタレや」と、拳をあげている。

「それが鼠に食べられた原因ですかね」

「あたためーてー、鼠^{えんちゆ}ん砂糖^{さうたー}じようぐーろー」と、あきれ顔になった。

「穀ーよー、また別^べぬ対策^{ちさく}さやー」

「大城先生、俺の畑の芋は半分駄目になりました。よろしく願います」

「穀ーよー、お土産^{みやげ}忘^わらんきよーやー」

「お土産って何ですか」

「あい、君やフリムン、俺顔見ち分からんばーい。古酒てー（俺の顔見て分からないのか。古酒だ）」と、自分の赤い顔を指さす。

「どこの古酒がいいですかね」

「ハーシエ、石川ぬむろん。忘らんきよー」と、今度は笑顔になる。

ある日の夕方。

やや熱い風が吹いている。稔とヤスは畑で作業していた。

遠くから、「へーい、ヤスオバー、稔よー」と声がする。近寄って来る男の顔は逆光で見えなかったが、迷彩服と歩き方で大城と分かった。

「まずいな、今日は何を要求してくるか不安になった。

「大城さん、今日はどうしたのですか。泡盛が足りなかったんですか」と、赤黒い顔に聞いた。

大城はへ、へ、へと笑い、「あらん、あらん（そうではない）」と、頭を掻いた。

「実よー、電力ぬ灰ぬくとうやしが、あれー間違がーとーたつきー」と、謝っている割に顔は平然としている。

「どうしてですか」

「確かにやー、電力ぬ灰ん水捌ーすしが栄養やねーらんどー（電力の灰も水捌けはするが栄養はないんだ）」

「そうなんですか」と、稔は不満顔になった。

「やぐとう、君むん芋がまあさたぐとう不思議やたんろー（君の芋が美味しかったのが不思議なんだ）」と、大城は悪びれる様子もない。

「でも、土に混ぜましたよ」

「やしが芋上等やたんやー。結果オーライやさ」と、大城の赤黒い顔が蒸した芋のように膨らんでいる。

大城は腰に提げた抱瓶から泡盛をコップに並々と注いだ。舌なめずりし、ゴクゴクゴクと喉に流し込んだ。

「ハーシエ、まーさつさー（美味しい）」と、抱瓶からまた注ぐ。

「稔よー、今日や灰ぬ事し迷惑掛きたぐとう、君むん畑手伝しーが来ろー」と、言う。

「やしがいやー、君顔、近頃、芋んかい似ていちよーんどー（君の顔は芋に似てきたな）」

「大城先生の顔も、芋に似ていますよ」

「ハツハツハハ。芋作やーや、皆似ていちゅーんやー。君や芋臭すんろー（芋を作っている人は、

皆似てくるな。君は芋の臭いもするぞ）」

大城と稔は、互いの顔をまじまじと眺め、爆笑した。

茜色に染まった夕陽が沈もうとしている。遠くに海が見え、白い船が進んでいる。その海が幻想的に美しかった。雲もいくつか芋の形をしている。

稔とヤスと大城は畑に座り景色を眺めた。大城は泡盛を飲み続けている。
「あつしえ、夕陽ぬ美さんやー」と、ヤスが楽しんでいる。
三人の後で葛が風で揺れていた。(了)

小説部門

奨励賞

三人娘譚

高柴 三聞

この時はもう昭和の初めごろでしたが、村からも町からも外れていた私たち家族の家は昼も夜も真つ暗なので私たちの家はユ―リー小屋と人々にあだ名されていました。屋敷と呼ぶにはあまりに小さく貧弱だったんでしょう。今、その家で育った私自身が思い出しても小屋と呼んだ方がふさわしい大變わびしく貧しい家でした。

私たちは父ちゃんと私、ウトとハルの二人の妹だけの家族でした。母ちゃんは物心つく頃にはいませんでした。身体が弱かったんだそうです。

父ちゃんは私たち娘三人を育てるために、毎日馬車馬のように働いていました。昼間小さな畑をやる傍ら豚と山羊を養っていました。

これらの家畜の餌やりは、はじめは私がやっていましたが、その後はウトとハルに引き継がれていきました。豚にやるカンダバーを刈ってくると（人間のぶんを少しわけておいてから）籠いっ

ばいにして豚の小屋に持つていくのです。

豚は頭がいいので、私たちが子どもとみると時折「ふごっ！」と大きな音をたてて私たちを襲うふりをしました。驚いてひっくり返った私たち子どもの姿を見ると豚は頭をゆすつて笑っているように見えた。尻もちをついた状態で豚の顔を見上げていると豚の顔が人間の笑い顔にも見えてきて何だかとても憎らしく感じたものです。私たちのために働く父ちゃんを手伝うために私たちも父ちゃんを一生懸命手伝っていたのです。

それでも、お金が無いので薪を拾い集めてから町で売ったり、たまには豆腐を作つて売りに行くこともやっていました。私は近所のお母さんたちの所をまわつては子守の仕事を良くさせてもらっていました。一回あたりは安いお仕事も何回も繰り返すとちよつとした稼ぎになったものです。

でも、一番実入りがよくて父ちゃんが活躍できる仕事はニンブチャーのお仕事が来た時でした。本当はもう、あの当時からすでに時代も変わつてしまつていてお葬式にニンブチャーの人たちが来ることは稀というよりもほとんどなかったのですが、ニンブチャーの家に生まれた父ちゃんは昔取つた杵柄ということで、この時代になつても仕事を頼む人がいたのだそうです。

昔はニンブチャーの人たちが沢山いて村や町を回つていたそうです。父ちゃんはそんな人たちの一員となつてあつちこつち回つたことがあるのだと私がとても小さい時にきかされた覚えがあります。

子供の私には何故だかよくわかりませんでした、娘たちは父ちゃんのニンブチャーの仕事の

際には特に汚くて真つ黒な穴あきだらけの服を見繕われて着せられました。本当に感心するくらいボロボロで大人になってからも思い出すたびに、あれは何処から持ってきたのだろうと不思議な気持ちになりました。おまけに頭から、やつぱり汚れて元の色がわからないような手ぬぐいをほっかむりのようにしてまかれました。手ぬぐいの感触は最悪でした。身に着け続けると頬のあたりにぬらぬらしたものが肌を汚して気持ちが悪かったです。あまりに服も手ぬぐいも全て汚れていたのどうとう鼻がむずむずとしてきて思わずくしゃみをしてしまうと「アイ！」と父ちゃんに小さい声で怒られて軽く小突^{スグ}されました。

そうして、葬儀の列の後ろから一生懸命泣く真似をしてついでいくのです。泣く真似を一生懸命続けていると本当に悲しくなってきたいつの間にか手ぬぐいの汚さも穴の開いた服も気にならなくなっていました。そんな私たちの泣き声につられて忍びなく泣き声があちらこちらから聞えてきて、みんなと一緒に泣いていると不思議な気持ちになったものですが、あの時の気持ちはちょっとたえようがない感覚でした。

お蔭さまで私たち姉妹は多分同じ学校に通っている子供たちよりも泣く真似だけは数段上、たつたはずですが、泣き真似をして何かいいことがあるとは思えなかったので、私はこの特技を大人になった今でも封印したままにしています。だいの大人が必至で泣く真似をするなんて変ですよ。

父ちゃんは今で言うところの演技指導のようなものを私たち姉妹につけてくれました。

「泣くにもいろいろあるんだぞ。忍び泣き、泣き叫び、小刻みに息が漏れてくる泣き方。あんま

りにも悲しいことがあつた時の泣き方とあまりにも嬉しいことがあつた時の泣き方。嗚咽ばかりで声を出さない泣き方。人が泣いているのを見て自分も思わず涙を流すもらい泣きつてのもある。まあ、他にもいろいろだ。でも派手に泣いている方がお客さんは喜ぶから、とりあえずは大声で元氣よく泣くんだ。結局それが一番だ」

私はあまりに不思議だつたので父ちゃんに何でこんなことをするのかわからないと直接尋ねたことがあります。

「父ちゃんは何で、私たちに泣きまねをさせてあるかせるの？」

父ちゃんは腕を組んでにやりと笑つてこたえました。

「人が死ぬというのは悲しいことだ。一人でも多くの人が悲しんでいると、その様子を見た人が、嗚呼この人は死ぬ前は大勢の人に好かれる素晴らしい人だったんだなと思ひこむだろ？人間嫌われ者でいるよりは、嘘でも好かれていた方がましだということなんだ」

幼かつた私は、そんなもんなのかなと思ひながら聞いていたものでした。

でもニンブチャーの仕事はお金だけではなくお葬式の饅頭やその他色んなものをいただいたので私たち子どもは、どこかで葬式が無いかとささやき合つたものでした。もちろん、父ちゃんに聞かれないようにしていましたよ。ばれたら父ちゃんに三人ともまとめて小突かれてしまいますから。

でも、お葬式と同じくらい実入りが良かったのはお正月の万歳（まんざい）だったと思います。お年寄りの中にはキョーゲンという人もいました。

父ちゃんは芸達者だったので三味線片手に滑稽な歌を歌いながら家々を回ってお金をもらっていました。

末の妹のハルが父ちゃんのお供をしていてたまたま儲かっているお家の所を回って、たくさんのお菓子をもらってきたときがありました。

家に帰った時ハルは満面の笑みを浮かべて開口一番に

「うさげものだよぉ！」

と大声でいって私たちを笑わせたものでした。

さらにハルは神妙な顔つきで、続けていうのです。

「ウサガミソーレ、ウサガミソーレ」

これにはいつも無口な父も腹を抱えて笑ったものです。

父ちゃんは本当に不思議な人でした。朝と夜、太陽に向かって毎日ウートートーをするのです。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

その様子方は一生懸命でなぜか子供の私たちが父ちゃんの背中を見詰めていると何処からともなく尊敬の念が湧いてくるのでした。何かを信じる人というのは、不思議と立派になるものなのかもしれませんが、実際はどうなんでしょう。大人になった今でも、私は父ちゃんのことを考えますが、あの姿に大事なものが隠されていたような気がしています。

父ちゃんは私たち娘にも近所の人にも優しい人でしたが、同時にある意味で厳しい人でもありました。

私が学校から帰る道すがら石を投げつけられながら餓鬼大将たちにいじめられていた時です。この子たちは私のことを「ニンブチャーの子」と呼びながらはやし立てたのです。

まだ男子より女子の方が体の大きい年ごろでしたから、いじめっ子たちは近づいたり離れたりしながら、私に捕まらないようにしていました。

それでも私はじっと口を真一文字にして我慢していると、餓鬼大将たちは飽きてしまつてどこかへ行ってしまうのです。しかし、私の気持ちは悔しさでいっぱいです。思わず心ならずも父ちゃんに強い口調で当たつてしまったのです。

「父ちゃんは本当のニンブチャーでもないのに何で拌みをしているの？ なにもいいことないのに何が楽しくて拌んでいるの」

その日だけは、いつもは優しい父が珍しく怒った眼をして普段からは考えられないような強い口調で答えました。

「お前は、仏様を何かくれるから拌むのか？ 父ちゃんはこうしてウガミをしながら自分自身は嘘も無く正しいことをしていると信じているから続けているんだ」

そういわれて私は何だか突然、悔しさと恥ずかしさと情けなさが心の中一杯に押し寄せてきて泣き出してしまいました。

父ちゃんはそんな私を黙って泣き止むまで抱きしめてくれたものです。

また、末の妹のハルの話ですがこんなことがありました。

ハルが父ちゃんの後ろからくつついて歩いていると突然父ちゃんが立ち止まりました。ハルは父

ちゃんの背中に顔をぶつけてべたんと尻もちをついたのですが、父ちゃんはそれにもお構いなしにハルのことも振り返らずにじつと立ち尽くしているのです。どうしたのかしらと不思議になつて、ハルは父ちゃんの前に回り込んで顔をのぞき見ると父ちゃんは目をつぶつて何かを聞いているような顔つきをしていたんだそうです。

ハルはしばらく父ちゃんが動き出すのを我慢強くまつていると十分ほどで再び動き出したんだそうです。

「父ちゃんは、何で固まっていたの？」

父ちゃんは、笑いながら答えました。

「固まっていたんじゃないよ。声が聞こえてきたんだ。不思議な声でね。耳から聞こえて来るんじゃないんだよ。心の中にすつと入ってくる声が聞こえてきたんだ。父ちゃんはその声の意味を一生懸命考えていたんだよ」

「で、父ちゃんは何が聞こえていたの？」

妹の問いには答えず、父ちゃんはただにこにこ笑っていたのだそうです。

あの時父ちゃんが聞いていた声が、神様か仏様かご先祖様なのかマジムなのか、今となつては分かりません。でもそのうちのどれかの声が聞こえてきても不思議じゃなかったなと思うのです。

私の父ちゃんは本当に不思議な人でしたから、人間以外の声と会話してもおかしくなった気がするのです。

そういえば、次女のウトが父と問答をしたことがありました。

「父ちゃんは仏様を拝んでいるんですよ？」

「そうだよ」

「仏様は見えないでしょ？」

「うん、そうだね」

「そうしたら、見えないものを拝むのだから何かを拝んでいるのもいいわけだね。今日国語でこんな言葉をならってきたんだよ」

「ほう、何だい？」

「鰯の頭も信心からって」

「そうか。お前が正しいと思うなら、鰯の頭を一生懸命拝むのはいいことだと父ちゃん思うんだ。そのかわり生中でやつちゃだめだ。何というのかな、全霊を賭してということばでいうのだけれども、それこそ必死で信じられるものなら……。そうだね、鰯の頭。いいと思うんだよ」

父の言葉を聞いてウトは再び考えるような仕草をしてから、さっきよりもっと真剣な目つきになって父ちゃんに語りかけました。

「父ちゃん。私たちはいつも天皇陛下のお御影にお辞儀して学校に行っているの。天皇陛下も鰯の頭みたいに信じたほうがいいのかな？」

父ちゃんは暫く考えこんでいました。怒られるのかなとウトが少し不安な気持ちになっていると再び父ちゃんは口を開きました。

「これは、父ちゃんの考えで世間様とは食い違うんだと思うんだ。だからこのことは内緒にしておくれ。父ちゃんね、天皇陛下は人間の世界では確かに偉い人だと思っただよ。だけれどもね、人は死ぬし偉い人も移り変わる。天皇陛下を敬うのもひよっとしたらおかしいって時代が来るのかもわからない。だから、父ちゃんは仏様を信じることにしたんだよ。ずっと永遠に変わらないものを信じることにしたんだな」

それからまた再び押し黙って長い間をおいてからぼつりと言ったそうです。

「人が人のために死ぬことを煽るのは、父ちゃんは間違いないんじゃないかと疑っている。もつとも確証もないが…今は怖い時代になりつつあるから、このことは他言はしないようにな」

ウトは父ちゃんの眼を真つすぐ見ながら力強く縦に首を振りました。

何となく時代は勇ましいを通り越して物騒で乱暴なことをがなり立てる人が多くなってきた、どこか不穏な空気で満ち満ちていたと思うのです。世間様が中国の戦争が終わらず国民も苛々としてきたころ、私は大阪の紡績工場に働きに出たのです。

大阪の紡績工場には遠縁のチルーおばさんという人を訪ねてきました。生まれて初めて島を出たのです。

船から降りて大阪の街を行くと何処までも何処までも土地が続いているので不安になりました。私は、みちみちいったい大阪の街は那覇や首里の何倍あるのかしらというのを一人考えこんでいました。多分、今という言葉の「現実逃避」というものだったのかもしれませんが。不安を紛らわせるためにどうでもいいことを考えこんでいたのかもしれないのです。

さてさて紡績工場での暮らしは大変でした。朝から晩まで機械の世話に追われてくたくたになって帰る頃には外は真つ暗になっていて後はボタンとお布団の上に倒れるようにして寝ていました。

そのうち気が付けば年の暮れにはいる頃、号外だということで見てみればアメリカと日本が戦争を始めたのでした。

私は訳も分からず体の奥から緊張が走ってカッ力するものを感じていました。

不思議なものです。私たち沖繩の人はあきらかに日本人の人たちから差別されていました。「リキ人」といつて眉間にしわを寄せて嫌がる人が多かったのです。

それでも、大阪の土地柄か朗らかな人もいてだいぶ救われたこともありました。

仕事場でも、社宅の帰り道でも、日本の人の眼があるときは必至で働いたり、必要以上に頑張つて見せました。

時には金槌を握りしめて男仕事を率先して引き受けてやることもありました。張り切りすぎて金槌で自らのひとさし指の先端を打ち付けてしまった時、工場の班長がせせら笑う様に言いました。

「男の仕事なんかするからだ」

私は傷の痛みと悔しさを黙って耐えました。泣いてしまったら負けてしまうような気がしたのです。そんな私ですら、日本がアメリカと戦うと聞いて、身が引き締まるような気分になったのは自分でも不思議な体験でした。

何だか身を改めて頑張ろうという気になったのはなんだったんだろうと、今でも自分自身分かりません。

ところが、この気分も打ち砕かれることになるのです。というのは、沖縄が空襲を受けた話をチル―おばさんからおしえてもらったからです。那覇でかなりの被害が出たということでした。

そんなことを聞かされるともうなんだか、いてもたってもいられません。それ以上に不思議で仕方ありません。何で連日連勝の日本なのに、沖縄にあれだけの空襲を受けるのか。とにかく不思議な気持ちでいっぱいでした。そして家族が心配で仕方ありませんでした。

手紙を書いて送ってみようかとも思いましたが、かえって不安な気持ちにしてしまったらどうしようかと、かといって私は元気に頑張ってます、そちらはどうですかと書いて送るのは返ってわざとらしい気もして……。悶々と悩んでいるうちに、とうとう島にアメリカ軍が上陸して沖縄は戦場になりました。島に渡りたくても渡れなくなってしまったのです。

私の住むところも連日空襲に怯えるようになりこちらにも、生きて帰れるかわからなくなってきました。

空襲ですっかり神経をすり減らして、あちこち灼けた街を彷徨っていると、たまらなく不安になってきたので、ふと父のことを思い出して河川敷の方で父がやっていたように太陽の上がる方向に手を合わせ南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と唱えていました。

すると不思議と不安な気持ちも納まっていき、頭の奥がずっと晴れてきたような気持ちになりました。

だしぬけに後ろから誰かが私に声をかけてきました。その人は五十恰好の黒い僧衣のお坊さんで自分よりも少し年下の小僧さんを連れている立派そうな方でした。

少し野太い声と威厳のある口調で私に話しかけてきたのです。

「あなた、御国は？」

「沖縄です」

「ほう、それはそれは遠いところから。いまは沖縄の人たちは大変難儀をしていますな」

「父と妹たちが心配です」

「それは、えらいお気の毒に。どうぞお気を落とさずに。今みたいにお念仏を唱えて阿弥陀様に一心におすがりなさったら、ええ。ときに、あなたはどこかで修行してましたか。仏道の？」

「いえ、父が熱心に拝んでましたが。でも今考えると我流で拝んでいたのかもしれませんが」

「信心に我流もガチョウもあらしまへんがな。全ては仏様のご縁のお導きですによつて」

今でも信じられない気持ちになりますが、このお坊様は本当に大変偉いお坊様で私はこの方のお引き立てにより仏教の施設で学び説教師となることになったのです。

その修行の間に私はチルーおばさんから父が戦争で亡くなったこと。ウトとハルの行方が知れなくなったことなど、聞かされました。思わず目の前が真っ暗になって膝から崩れ落ちそうな気持ちに襲われました。

ところが不思議なもので私は、絶望すればするほど勉強と修行に励んだのでした。

それこそ一心不乱に取り組んだのです。朝は日が上がる前から起床し、夜は決まって真っ暗に

なつてから床に就きました。

努力の甲斐あつて晴れて説教師となつたのですが、しばらくは教団の関連学校施設で先生のよ
うなことをしていました。多分あれば、補助教員というやつでしようかね。

それはそれで、とても充実した毎日でした。子どもは元気いっぱい可愛らし、でもやんちゃ
で大変でした。

仕事の傍ら父ちゃんのお霊の成仏を願い、妹たちの無事を祈りました。人が聞くとき自己満足やつ
て、いかもしれませんが、もう当時の私にできるのは本当に祈ることだけでした。戦争が終わつ
たとはいえ沖縄は今や外国になつてしまっていましたから、もう私にはどうしていいやら、さつ
ぱりわかりませんでした。

チルーお婆さんも亡くなつて、その娘の美津子さんが私の所にお手紙を持ってきたのは沖縄の
本土復帰の翌年でした。

差出人は私の妹のウトでした。懐かしい気持ち一杯で手紙の封を切ると丁寧な字で手紙がつづ
られていました。

拝啓

鶴ねーねー様

戦争で家族がバラバラになり淋しい気持ちでしたが、不思議なご縁で別々の知人から同
時期にねーねーと妹のハルが生きていることを知らされました。

父ちゃんは弾に当たって亡くなってしまったと聞いておりますが、私たちがまた三人集まったらきつと喜んでくれると思うのです。

それぞれ、別の人生を生きてきましたが、どこかでまた会えるのではないかということを感じて生活してきました。

でも、心の中で本当に生きているのかしらと思うたびに胸の奥がうずくのを感じておりました。

是非、機会を作って三人で会いましょう。きつとこれは神様のお導きです。奇跡に感謝いたします。

ぜひぜひまた以前のように笑い合いながらお話をしたいです。

かしこ

大城ウト

追伸

私も大人になっていますが、懐かしさのあまりねーねーと書いてしまいましたが、どうか笑って許してやってください。是非お会いした際、ねーねーと呼ばせてくださいね。

私は肉親が生きていることにはじめは茫然としてしまいましたが、後から涙が溢れてきて前が見えなくなっていました。

死んだのかもしれないと思っていた二人が生きていた。感謝しても感謝しきれません。うれしくてうれしくて、一人大声で泣きじゃくりました。

でも、ふとした拍子に心の片隅のどこかで何だか引つかかるなど、感じたりもしたのですが…。何はともあれです。その時は肉親が生きているという喜びで他のことは後回しでありました。

それからはチルーおばさんの娘さんだけでなく、沖縄に住んでいるチルーおばさんの妹という人や他の親せきの人が色々助けて下さって、私はついに沖縄の土地に再び帰ることが出来ることになったのです。

私は、船で沖縄から参りましたが、今度は大阪から船で沖縄に向かったのです。

港では、私が沖縄に来られるように骨を折ってくださったチルーおばさんの妹のカメねえさんとその息子さんが出迎えに来ていました。

私は僧服を着ていたのですぐに向こうがそれとわかって見つけてくださいました。

挨拶を交わすすぐに車に乗って移動することになりました。カメねえさんと私は車の中でお話をしました。

「久しぶりの沖縄だけでも、沖縄だいぶかわったでしょ？」

「ええ、戦争は激しかったんでしょうね」

カメねえさんは静かに頷くと少し遠い眼をして車窓の風景に目を遣りました。私の眼にも記憶で観た風景よりも石灰岩の剥き出しの風景が眼に飛び込んできました。あちらこちら、見慣れたものが失われるのを目にすると、改めて戦争がこの島を真っ平にしてしまったのだなと物憂い気

持ちで車窓の風景を見つめておりました。

「あなたのお父さんが亡くなったことは聞いているでしょ？」

「詳細は分かりませんが、そう聞いております」

カメねえさんは深いため息をついてからぼつりと話しをつづけました。

「おばさんも、この目で見たわけではないのだけれども、聞いた話では砲弾が近くで炸裂して破片を身体に受けて血を流して倒れていたみたい。最後まで、あなたたち三人の名前を口にしながら、守ってあげてく。ださいと南無阿弥陀仏を唱えていましたということでしたよ」

「そうでしたか」

私は目頭が熱くなるのを感じながら顔を伏せました。

「ごめんなさいね。近所の人が遺体をアコーの木の横に埋めて、目印の代わりにしたのだけれども、この木も周りの建物と一緒に焼けてどれがどれかわからない有様で、何の役にも立てなくて本当に申しわけない」

「いいえ、あの激しい戦争の最中ですから。本当に色々とお世話になりました。感謝です」

私は車の中で、カメねえさんの手を握ると、カメねえさんも無言で私の手をぎゅつと握り返してきました。節くれだった手でしたが掌の温かさが私の心に届いた気がしました。

私の手の上に、カメねえさんの涙がぼたぼたと握りしめた手の上に落ちてきて一粒一粒の温かみが私の気持ちをさらに溶かしていくような、そんな感触を心の中で感じていました。

私は、カメねえさんの家に泊まることになりました。カメねえさんの家のお仏壇の前にある大

きなちゃぶ台でカメねえさん以外の親戚とも暫く談笑していました。

それから、私は再び車に揺られ沖繩市のとある喫茶店に向かうことになったのです。そこで、ウトとハル、三人で顔を合わすことになっていたのです。

待ち合わせの喫茶店というのは白く塗られたコンクリート造りの平屋で木の厚い頑丈そうなドアが取り付けられている建物でした。中に入ると西洋風の置物や時計などがたくさん飾られていました。

「あいや、外国に來たみたい」

私は思わず独りごとを呟きました。なんせ喫茶店も生まれてこのかた入ったことが無かったものですから。

黒い木の棚や艶を消した木の床がとても落ち着くような場所でした。

カメねえさんと運転をしてくれた息子さんはカウンターの方に座り、私は奥の四人掛けの椅子に座って妹たちを待ちました。この時生まれて初めてホットコーヒーというものを飲みました。深みのある苦みを舌の上を感じながら、生まれて初めてのコーヒーを楽しみました。

外の景色に目をやると、建物自体が高台にあつて、そこを通る道の両サイドに椰子の木が並んで植えられており、それが優雅に風に揺られていました。

私は独り胸が高鳴るのを静かに抑えるために数珠の玉をひとつひとつ数えながら念仏を心の中で唱えておりましたが、さすがに妹たちは変わっていないだろうか、どう生きていたのだろうかということが気にかかつて気がそぞろになってしまいます。

ドアベルがカランコロンと涼やかな音を立てました。一人の女性のお客様でありましたが、どうやら妹ではないと思いました。キリスト教の尼僧姿の人でしたので。

私は目を伏せて手の中の数珠に目をやりました。数珠の鈍い光を何とはなしに見つめていると、不意にねーねーと呼ぶ声がしました。

驚いて顔を上げると、あのキリスト教の尼僧姿の女性が私に手を振っているではないですか。懐かしさや嬉しさよりも先に胸に届いた感情は驚いたというのが一番の気持ちでした。

キリスト教の黒い尼僧に包まれた人は真つすぐ私の所に近づいてくると、私の方もようやくその人が妹のウトだということが分かったのです。そして、手紙を読んだ時の違和感の正体がわかりました。ウトはカトリックに入信していたのです。

「お姉さんお坊さんになったのね！」

「あなたも、キリスト教の信者になったのね」

「そうなの。今は修道院にいるの。」

妹と私はお互いどんな暮らしをしてきたか、どう生きてきたかを伝えあったのでした。

妹のウトは避難しているとき家族とはぐれて迷い込んだ先が、カトリックの教会だったのだそうです。以後は教会の人たちとともに行動を共にしたのだそうです。

日本の兵隊さんとはかくとして、アメリカの兵隊さんはクリスチャンには乱暴を働かなかつたので大分怖い思いをしなくて済んだと妹はいつておりました。

妹が神父さんにお尋ねしたそうです。神様は何で沖縄の人が苦しむのを見ているだけで何も助

けて下されないのでしょかと。

愚かな行いは人間が行った事なのです。戦争は人間が始めた愚かな行為です。その愚かな行いによって生じた苦しい状況の中で正しい生き方をする人間のことをみつめていらつしやるのですよと神父様はお答え下さったそうです。

それから、妹は神父さんの後ろについて熱心にお祈りしたり、そのお話を熱心に聞くようになったのだそうです。

ある時、神父さんのお話で、神様は昔も今も、そして未来も変わらず私たちを見つめて下さるというお話をして下さったのだそうです。その時、妹は父ちゃんが言っていた変わらない大切なものと同じことをおっしゃっていると思ったのだそうです。父ちゃんのずっと永遠に変わらないものという言葉を思い出しながらお祈りをするようになって、いよいよ熱心に信心するようになったのだそうです。

戦後、妹は修道女として信仰生活をスタートさせることになったのだそうです。色んな境遇の子供たちに接することもあり、今は混血の子供たちの支援をしているのだそうです。

私たち姉妹の話は過去にいつたり現在にいつたり、さらには未来に飛んだりと二転三転しながら話のころがつていくようで、今まで会えなかった思いがうれしくて飛び跳ねているような気がしたものです。

お話が盛り上がっていると、勢いよくドアベルがカラコロカラコロと音を立てました。

着物姿に白い羽織を着たカンブー姿の女の人が両手にいっぱいビニール袋を持って転がり込

むようにして入ってきました。

「ウサガリものだよお！」

姿は大人の女性でしたが、間違いなくハルでした。

「でも、あの格好は」

と私とウトが同時に呟くと、その声が耳に入ったか入っていないかわかりませんがハルは大音声で言ってきました。

「今、ウガミが終わって帰ってきたところさー。お礼のお菓子一杯もらってきたからうさがって！」

この子だけは本当に何にも変わってないと思うと心の底からおかしみが湧いてきて気が付けばウトと二人声を上げて笑ってしまいました。

ハルは意味が分かっているのかわからないのか、一緒に声を出して笑っています。

「あいやー、仏様とキリスト様と沖縄の神様が集まって来たね」

と、呟いた声が聞こえてきました。それを聞いて私たちは余計に笑い声を出して笑い合ったのでした。

ハルもまた、ばらばらで逃げたとき逃げ込むところを必死で探していました。そして目に飛び込んだのが、暗い穴ぼこでそこに隠れたら身が守られると直感して飛び込んだそうですが、これが思ったよりも深い穴で脚こそくじきませんでした、とてもじゃありませんが子供一人で上がってこれないような高さの所だったそうです。

妹は暗い穴の中で岩の上に垂れてくる雨水をなめながら暮らしていたのだそうです。それが三、四日ほど続くと元氣も亡くなつて穴の底で座り込んでいたそうです。

その時、ぼつりぼつりと声が聞こえてきたというのです。

その声は耳から聞こえてくるのではない、頭の奥から、どちらかといえば直接心に聞こえてくる声だったそうです。

「心配しなくてもいいよ。あんたはまだ生きるよ。でもね、お役目があるよ」

ハルはあの時聞いたお役目って何だろうと今でも時折考える時があるのだそうです。そして同時に、前に父ちゃんが聞いていた声はこのことかなとも考えたりするのだそうです。

その声を聞いている最中、穴の外からハルのことを呼ぶ声がしたのでそうです。今度は頭の中から聞こえる声ではなく耳から聞こえてくる声でした。

見上げると老婆と年配の女性が穴の中を覗き込んでいました。ハルはこの人たちに助けられ行動を共にすることになったのですが、この人たちは地域の拝みをするユタの人たちでした。あの穴は、ユタが修行するのに使った穴だったのです。

ハルは神や靈魂^{マフイ}の声だけではなく人間の話も良く聞く機会が増えたのだそうです。自分が何かを語るのではなく聞いたことをそのまま伝えることで人が救われるのだなという姿を目の当たりにして、父ちゃんが実践していたことの意味をハルは自分なりにいつも考えているといっていました。

三人の話は尽きることなく次から次へと紡がれていきましたが、不意にウトが呟くように言い

ました。

「ふしぎだねえ。」

「どうして？」とハルが不思議そうな顔をしました。

「ねーねーは仏様を拝むこと。私は永遠のものを信仰すること。ハルは見えない物の声を聞くと、でも、これは父ちゃんがやっていたことを一人一つづつ継いでいるんだね」

私は感心して首を縦に振ると、ウトが手を叩いて笑い出しました。

「だって、三人とも父ちゃんの子だもの」

そういうと思う私たちは顔を見合わせて笑いだすのでした。

三人はお互い違う道を歩みながらいつまでも仲良く絆を深めていくのでした。

了

小説部門

奨励賞

恋敵（ライバル）

深緑の和解と友好編

キャサリンバレンティンハート

「愛は人を狂わす」と言われている。恋をした人なら分かるのではないだろうか。もしこの言葉が今の私が聞いたら、首がもげる勢いで頷くだろう。

私の名前は八部 みや（やべ みや）。早速だが、私は今、高校の入学式の途中なのだが、毎日がドキドキとわくわくでいっぱいになることを確信している。なぜなら、新しいクラスメイトのとある男の子に一目惚れをしてしまったからである。しかも私の目の前に座っている。

新しい環境と場所に不安を覚えながら校門をくぐったとき、どこに行けばいいのかわからなくて右往左往していると、彼が私に「もしかして同じ新入生？ 俺もだよ！」と話しかけてくれて、

私を入学式が行われる体育館に誘導してくれた。彼は体育館に着くなり、すぐに「これからよろしく！」と言い残して体育館の中に駆けていった。まるで突然風がやって来て、また突然過ぎ去っていったかのような感覚に見舞われた。

はっとした私は、少しお手洗いに寄って顔を洗ってから体育館に入った。そのとき、薄暗いお手洗いの少し汚れた鏡でも一目で分かるくらいに顔が赤くなっていた。彼みたいに爽やかで明るくて、顔もスタイルも良い人がどこにいるのだろうか？ まさか彼はチョコミントの擬人化したものではないのだろうか？ ミントの爽やかさにチョコの優しく魅力的な甘さのマリアージュだ。

一旦落ち着こう。入学式が始まると、在校生によるアナウンスと共に入学式のプロローグが進んでいく。校長先生による祝辞や、生徒会長の歓迎の意を表すスピーチに校歌斉唱などが順調にプロローグ通りに進められている中で、私だけがまるで時間に取り残されているような、半分夢の中にいるような気分でも何も入ってこない。何といっても彼が視界の先にいるからである。

入学式が終わり、新しい先生に引率されてクラスに向かうときになってようやく意識がはつきりとした。そして冷静になって考えてみた。名前も知らない私に平然と声をかけられるくらいに社交的な彼なら、すぐに友達ができて、もしかしたら彼女もできて、根暗で口下手な私なんてすぐに見向きもされなくなるだろう。彼は近づきたい憧れの高嶺の花として、遠くで見えているだ

けしかできないのかもしれない。そして、中学のときと同じようにずっと一人ぼっちで高校の三年間をまた過ごすのかもしれない。

これが私の平常運転である。中学校のときも小学生のときも幼稚園でも保育園でもだ。根暗な私は、クラスについて席に座ったら鞆からお気に入りの本を取り出し読み始める。そして飽きたらメモ帳という名の自由帳にシャーペンで絵を描き始める。よく「真面目そう」と言われるが、いつも授業には主体的に取り組まないで本を読んだり、絵を描くのはもちろん、こっそりイヤホンで音楽を聴いたり、学校で使う端末でネットサーフィンしたりしていた。

だがすべての授業でこういうわけではない。音楽、美術、英語、国語の文学の授業のときだけは誰よりも真面目に主体的に取り組む。好きだからだ。私は自分が興味のないことにはとことんダメなのである。特に数学と体育は本当に苦手を通り越して嫌いである。

自分の世界に入っているそばで、周りの生徒たちは新学期初のショートホームルームを始めていて、一人一人番号順に自己紹介をしていた。そして彼の番に近づいてきた。本人でもないのになぜだか緊張してきた。そして彼の番になり、彼が立ち上がって言った。

「アイシ キウヤです。皆さん、一緒に高校最初の一年を盛り上げましょう！」

新学期で緊張しているクラス全員を吹き飛ばすくらい明るく短い自己紹介だった。なるほど、キウヤというのか彼は……。愛称は「きつちゃん」だろうか？ ……だめだ、彼は高嶺の花。こんな妄想をしてもどうせ話しかけることでさえもできないから無駄だ。

「次」

おそらく相当の場数を踏んできただろう風格を感じさせる先生の声とともに、クラス中の視線が私に注がれる。「もう私の番?!」 たった今彼の自己紹介が終わったばかりだし、彼とは出席番号が10以上も離れているのに……。どうやら私が現実で起こりえない妄想をしている間に、私の番まで進んでいたようだ。

「大丈夫ですか？」

「はい……」

恥ずかしさで声にならない声で返事をしながら立ち上がった。周りの視線がじりじりと照り付けてくる。そして私は重い口を開いた。

「私の名前は八部 みやです。いつも机に向かって真面目に真顔で真剣に何かやっていて話しかけづらいと思いますが、別に暇つぶしをしているだけなので、ぜひ話しかけてほしいです。一年間よろしく願います」

最悪の自己紹介をしてしまった。口下手なのに「話しかけてほしいです」？ 何という矛盾なんだ！ それに誰がこんな見た目からして根暗な人に話しかけるのだろうか？ 本当に恥ずかしい。しかも出席番号が最後というのも相まって、より目立ち、恥ずかしさが際立つ。そんな私は自己紹介が終わったら、気を紛らわすように今度はメモ帳を取り出し絵を描き始めた。

そして、ショートホームルームが終わったとき、恥ずかしさと緊張で首が締まるような思いを感じて、外の空気を吸いに教室から出たときだった。

「ねえ！ 君！」

ついさつき聞いた声でした。振り返ると彼がいて、私を見ている。彼がまさか話しかけてくるなんて……。『一体何の用だ？』と嬉しい反面、少し疑いを感じた。すると彼が駆け寄って来てこう言った。

「君、みやつていうんだね？ さつきお互いに名乗らないで行っちゃったからさ……。改めてこれからよろしく！」

そう言いながら手を差し出してきた。

良いのか？ こんな私と関わって。こんな見た目からして明らかに根暗で口下手そうな、よく分からない女と関わっても、彼はいいのだろうか？ もつと他に一緒にいて楽しそうな人たちがクラスにいるのに……。なんだか申し訳ない……。でも嬉しいし、私もそれを望んでいる……。そんな葛藤が私の中で巡り巡る。

「大丈夫？」

心配するように彼が聞いてきた。

「いや？ そんなことないよ？ べ……。別にそんなことないの……。ちよつと……。手汗が気になつてさ……」

最悪だ。あからさまに動揺して挙動不審になってしまった。しかも目と鼻の先の距離でだ。もしかしら変に取られてしまったかもしれない。明らかに気まずかったであろう。それに汗をかくような気温でもないし、手汗だなんて明らかに嘘にしか聞こえなくて、遠回しに拒絶しているみたいだ。彼はどう思ったのだろう……。

「ああ！　そういうの気にしちゃうタイプだったんだーごめんごめん」

彼がへらへらと答えた。

彼のへらへら具合から見ると、どうやら彼は私の挙動不審さに何も感じなかったようだ。よかった……。それにそんなへらへらと言われたら、なんだか気まずさを感じなくなってくる。きっと彼のコミュニケーション力の高さで明るさがゆえた。きっと他の人とであつたら、かなり気まずかっただろう。

「そういえば、私を呼び止めた理由はそれだけ？」

自分が本来行おうとしていた、外に空気を吸いに行くというタスクを達成するために聞いた。勇気を出して聞いたのはいいが、少し冷たい言い方になってはいなかっただろうか？　さあ、彼

の人を気まずくさせないコミュニケーション力でどう対処するのだろうか、見ものである。

「ああ、あと次の時間移動だから一緒に行かない？」

私の言い方が冷たすぎたのか、「なぜ呼び止めたのか？」という私の問いにどぎまぎしてしまつたのかは分からないが、今的には、勝手に私がそう呼んでいるだけだが「人を気まずくさせないコミュニケーション力を持つ男『アイシ キウヤ』」という異名を持つ彼も、さすがに気が引いたか……。

「もちろん」

次の時間はまた体育館に戻って、今度は「新一年生オリエンテーション」たるものをするらしい……。正直に言わせてもらえば、なぜそのまま体育館に残って、そのまま入学式の次にやらなかったのか疑問だし、時間の無駄だと感じるが、そんなことは置いておいて、なぜ彼は私に話しかけ、一緒に行動したがるのだろうか？

まだ新学期の初日だから、そんなこと疑問に感じるのには早すぎるが……でも確かに、よく考えてみたら新学期の初日だし、まだみんなお互いに心情的に距離がある。一、二カ月経たないと

仲良くはならないだろう。つまり彼と一緒にいられるのも、どうせ今のうちだ。また来るかもしれない孤独な学園生活が来る前に、彼との学園生活を楽しんでおこう。でもやはり疑問が残る。彼ならクラスにいた他の同性の人たちと一瞬で打ち解けられるし、異性である私となんかよりも楽しいはずなのに、どうして私なのだろう？

「なんだか難しい顔してるね？ 考え事？」

えっ？ 一体何を聞いてきているのだろうか？

「何にもないよ」

緊張でそっけなく答える。

「何ていうか……困り顔だね」

「ええ？」

思わず声が少し大きくなった。

「だって眉毛が常に八の字だし、口角も下がってるし、どう見ても困ってるよ。何かあったの？」

「何もないよ。元々の顔が困ってるのかも」

緊張で可笑しな返答になってしまった。にしても、そのようなことを出会って初日の人に言うことなのか？ でも他の人からそんなこと言われても、なんだか馬鹿にされているようにしか聞かえないかもしれないが、彼が言うただ純粋にそう思っているように聞こえる。彼に一目惚れしていて、それでフィルターが掛かっているだけなのかもしれない。どうだろうか……実際は……。

「そういえば、新生オリエンテーションなんて何するんだろうね？」

緊張を破って初めて自分から話しかけてみた。

「さあ？ 校則の説明くらいじゃない？」

気さくに返してくれた。

「やっぱりそうだよね」

彼と話しているうちに自己肯定感がじわじわと上がっていくのが手に取るように分かる。まさか私がこんな素敵な人と一緒に話しているなんて、たった数時間前の自分なら思いもしなかっただろう。

「じゃあ俺は自分の出席番号のところに座ってくるよ。じゃっ！」

はあ……ため息が出てしまう……。なんていうか……語彙力を失ってしまう。

鐘が鳴り、新一年生達がぞろぞろとクラスの番号順ごとに並び、新入生オリエンションた
るものが始まる。親の都合で実家から少し遠方にある私立の小中一貫校に下宿しながら通って
たおかげで、公立校がどんなところか知らない私は、自分の通っていた学校との違いに少し戸惑
いを感じつつ、失態を犯さないよう説明される校則をしつかりと肝に銘じた。

その校則の中でシヨックだったものは、学校中は携帯電話の使用が認められないことと、昼休
みは校外に出てご飯を食べに行くことができないことである。私の通っていた小中学校では、授
業中でなかったら携帯電話の使用は大丈夫であったし、昼休みに先生の許可を取りさえすれば外

に出てご飯を食べに行くことができた。

少し郊外にある学校だったため、そこまで大きな商業施設はなかったが、あまり同級生に出くわさない、人が少ない昔ながらの商店街があつて、そこにあつた昔からあるような、もう常連さんしか通わないレトロな雰囲気漂う喫茶店が私のお気に入りであつた。

もう一つのお気に入りもあつて、喫茶店から二、三軒離れたところにある「音楽の店」という直球すぎる名前で、CDはもちろんレコードやカセットまで売っている店があつて、そこも同級生が来なくてお気に入りであつた。

昔から小食で偏食な私は、昼休みになつたとたん先生の前へ走っていき外出の許可をもらつて、最初に「音楽の店」に行つて色々な昔の曲を聴いて、昼休みが終わる20分前に喫茶店に行き、ホッとの抹茶ラテに店の看板メニューである抹茶タルトを食べて、レシートをミートソーススパゲッティとシーザーサラダに「偽造」してと頼み、「偽造レシート」をもらつたら、学校に早歩きで帰る。それが私の昼休みのルーティーンだつた。

そんな私の昔話よりも、彼はどうなつたのだろうか？ 勇気を出して列の横に顔を出してみると、彼は前後の男子たちと話していた。

「あつ……」

思わず声が小さく漏れる。

なぜだか彼を取られたように感じた。まずそもその話、彼は私のではない。軽い嫉妬のような感情が芽生える感覚が全身を駆け巡る。もしかしたら、もしかするとこの時間が終わって教室に帰るときになったら、彼は私のことなど忘れて、彼らと笑いながら私の横を通り過ぎるだろう。

「それでは、これにて新入生オリエンテーションを終わります。次の授業に遅刻しないように」

先生の終わりの挨拶と共に、一斉に生徒が立ち上がり後ろを向いて歩きだす。私はただ立ち尽くしている。生徒が私を避けるように横に抜けていく。彼が見えると、まださっきの人たちと話していた。それもかなり仲が深まっているようだ。そして彼らが目の前に来ると、他の生徒と同じく私の横を抜けていった。

もう周りには後片付けをしている委員会の生徒と先生しかいない。こうなることはちゃんと分かっていた。だが、苦しい。私はおぼつかない足つきで教室に帰った。

教室ではまだ彼がさつき話していた男子生徒と話している。それも楽しそうに。反対に私は一人、教室の隅っこでポツンと座っている。また高校の三年間も一人ぼっちが確定した。別に昔から変わらないことだが。何かが違う。すごく心が痛い。一人でいることにこんな気持ちになったのは初めてだ。

今日は一日中この、何というのか分からない未知の感情にさいなまれながら一日を過ごした。ついには、帰りのショートホームルームが終わり下校しているときに、訳も分からず勝手に涙が出て来て、近くの公園のベンチで座り静かに泣いた。

今まで、ペットの犬が亡くなるくらいによほどのことがない限り泣くことがない私が泣いた。涙が崩落したダムのように一気に瞳からこぼれ落ちる。これは失恋なのか？ 彼は新しい友達ができただけで、恋人ができたわけでもない。なんだかややこしくなって、止まりかけていた涙が再びあふれ出てくる。涙は血を濾したものだと言ったことがあるが、貧血にでもならないだろうか？

一通り泣き終えた私は立ち上がり、涙でぐちゃぐちゃになった顔を見られないように走って家に帰った。

「ただいま……」

ほぼ音の判別のつかないくらいに小さい声で言った。

だが家には誰もいない。両親は自営業である抹茶製造販売関係の出張で、半年も出張に行っている。なぜこんなにも期間が長いのか。両親曰く、「最近流行っている抹茶スイーツブームに合わせて、スイーツの甘さに負けない濃い抹茶を作る研究に出るから」とのこと。私の両親は抹茶の製造と販売をしているのである。

だが小さい頃の私はカフェインアレルギーを持っていたので、先ほども言った実家から遠方にある私立の小中一貫校に通っていたのだ。あと小中時代の昼休みのルーティーンで抹茶ラテと抹茶タルトを食べると言った。つまり私は毎日アレルギーの症状に苦しみながらも、毎日欠かさず食べていたのだ。

親戚の家に預けられていたが、親戚には事前に私の両親からアレルギーのことが伝えられており、家では絶対に食べられなかったのだ、なおさら毎日のランチルーティーンが楽しみであった。ちなみにアレルギーの症状は動悸や吐き気に下痢などが出るが、当時の私は何を思ったのか「逆

に美味しすぎてもっと体に取り込めるようにしているのでは？」と思っ
ていつもポーカーフェイスでやり過ごしていたが、体調が悪いときに倒れるくらいに症状が強く出てしまい、そこから加減を覚えた。

さて、彼にブローケンハートな私に今必要なものは何か？ そう、大好きな抹茶だ。いつでも部屋から出ることなく抹茶が飲めるように、部屋に電気ケトルと選りすぐりの抹茶達が、本来勉強道具が置かれてあるべき学習机に常駐してあるので、あとはちゃぶ台に茶菓子を置くだけで完璧だ。

「はあ……」

静かな空間で温かい抹茶を飲むことほど極上で落ち着ける時はないと言い切れる。

「バカらしい。今日のことは忘れよう」

抹茶の力で気持ちの整理がついた私は、抹茶を飲み切ると、部屋にあるまだ片付けていない荷物を片付け始める。結局その日は荷物の片づけで疲れて、お風呂に入った後にすぐに眠ってしまった。

次の日の朝、夜遅くまで作業をしていたためか、倦怠感のせいで起きられなくて学校に遅刻しかけてしまった。それにいつも授業の暇つぶしに使うノートと本を家に忘れてしまい、残っているのはワイヤレスイヤホンとスマホに入っている音楽のサブスクリプションだけだ。

入学して二日で校則違反で注意はされたくないが、今日の授業はあいにく全て退屈な授業だけである。仕方ないので先生に見つからないようにイヤホンを付け、スマホを机の下に隠しながら音楽のサブスクリプションを開き音楽を再生した。最近のお気に入りには80年代の歌手ケイト・ブッシュの代表曲の「Running Up That Hill」で、ほぼ一生と言ってもいいくらいに何度もリピートして聴いている。

曲が二、三回回ったときだった。最大音量に近い音量で聴いていたが、それでも聞こえるくらい騒ぎ声が聞こえてきた。何かと音楽を止めて周囲をうかがってみたら、キウヤとその友達が楽しそうに騒いでいる。だが一人多い？ あれは女子生徒だ。私は思わずイヤホンを外した。注意深く観察していると、その女子生徒は彼にさりげなくボディタッチをしているじゃないか！

「えっ……」

心の奥底からじわじわと何かが込み上がってくる気がする。昨日の悲しみでぐちゃぐちゃに

なったような感情ではない。憎悪や嫉妬などの汚く醜い感情がぐつぐつと沸騰してくるように、段々と込みあがってくる。彼女が彼にボディタッチを決め込む度にその感情は勢いを増していった。十数回続いて、我慢のリミッターの限界という鍋の蓋を押してきた。

彼女が何回目なのかも分からないボディタッチを決め込んだとき、鍋は吹きこぼれてしまった。私の体は勝手に立ち上がり、名前も知らない彼女に一直線に向かい言った。

「ねえ、何の話をしているの？ イヤホンしても聞こえて来てさ、どれだけ楽しいんだろうって思ってた」

それでも皮肉っぱさを抑えた方だ。

「抹茶味のスイーツはアリかナシかについて話してたの」

例の女子生徒が答えた。

驚いた。憎悪や嫉妬に駆き立てられているというのに、まるで好意的に興味を持って話しかけているように見せられるなんて。昔からのポーカーフェイスが上手なのかは分らないが、彼ら

も何とも思わなかったようだ。それにちょうど私の大好きな抹茶の話をしているじゃないか。ちょうどいい、自然にこの女子生徒がどんな人なのか探ることができる。

「えっ!? 私抹茶好きだよ!」

まるで彼女に対して憎悪の感情も嫉妬心も抱いていないかのように言った。

「うつそー?」「えー、大人ー」

私が醜くも憎悪と嫉妬に駆き立てられているのも知らずに、ゆるく相槌が飛び交う。

「みやだよね? 普段から抹茶飲むの?」

憎悪と嫉妬の根本的原因である女子生徒が軽々しく私の名前を出してくる。

「うん。えっと……名前何だっ……け?」

最初から聞いたこともないのに、あたかも聞いたことがあるが忘れてしまったように聞く。

「去来川（いさがわ） さりなだよ！ 普通にさりなつて呼んで！」

ほう……さりなか……。名前からしても見た目からしても元氣そうで、私とは正反対そうだがまず名前は入手した。あとは自然と会話するうちに色々な情報が手に入るだろう。例えば好きな食べ物や住んでいる場所、趣味に、もしかしたら……彼が好きかどうか……。まず、このさりなという女子を徹底的に調べよう。この女は注意人物だ。

「そういえば、みやの席に掛かつてるあの袋つて、駅から五分くらいのところにある有名な『深緑の恋』 っていう抹茶屋さんのだよね？」

さりなが聞いてくる。

「うん、私の実家なの」

当たり前のことを言うようにさらつと言つてのけた。

「ええ!? 嘘だ！」

「うん、ほんと」

このあと私とさりなは、キウヤを含む他の男子を置いてきぼりにして抹茶について語り合った。さりなは最近抹茶スイーツについて興味を持っているらしく、私の実家である抹茶専門店「深緑の恋」に行きたいと思っ^ていたらしい。だがもちろん店の主である両親は出張に行っている^{ので}、店はしばらく開かないが、彼女に別におすす^めの抹茶専門店を紹介し、一緒に行くことになった。

にしてもまさか抹茶が好きな人と出会えるなんて思いもしなかったが、その相手が恋敵（ライバル）だなんて複雑だ。

その日のその会話から、さりなは休み時間になる度に私の隣に来ては、美味しい抹茶の選び方や抹茶に合うお菓子、おすす^めの抹茶の店やさりなが行きたい抹茶の店に行こうなどの話をするようになった。最初は恋敵（ライバル）意識で嫌悪感があ^ったが、私の好きな抹茶パワーのおかげで薄れていき、私からも会話を繰り出すようになった。

そして学校が始まって初めての週末が来て、私とさりなで抹茶スイーツが人気のカフェに行くことになった。昼前に各自家で昼ご飯を食べた後に、駅ナカのカフェに待ち合わせすることになっ

ている。今回はさりなが気になつていふという、最近できたばかりのカフェに行くことになつてゐる。抹茶通の私でも忙しくてまだ行けていなかったの、正直楽しみで仕方ない。

店のある通りに曲がると、早速さりなが店の前にいるのが見える。そして一緒にキウヤも含む男子軍団も、なぜかいる。一体全体どういうことだ？ という疑問をぐつとこらえて、かつ好きなキウヤに変な目で見られないように、姿勢や歩き方をさりげなく直す。そして恋敵（ライバル）とキウヤとその他男子の元へとたどり着いた。

「やつほー！ 抹茶マイスター！」

さりならしい元気な一声だ。

「やつほー。なんだか人が多いね」

対して私は落ち着いたトーンで返す。

「この男子たちが抹茶について何にも分かつてないの！ だから抹茶というのが何なのかを分からせるために呼んだってわけ」

なるほど、たしかにこの男子たちは抹茶の魅力を何一つとして分かっていなさそうだ。ちょうどいい、話相手が増える機会かもしれない。今日は抹茶というものをとことん叩き込んでやろう。特に私の大好きなキウヤには、私の好きな抹茶を好きになつてほしい！

なんていったつて私は抹茶でできているようなものだ。両親の職業は抹茶の製造販売業、私の好きな食べ物も抹茶、私の好きな色は抹茶色（次に茄子紺色が好き）なくらいだ。もはや抹茶が好きという言葉は私が好きという意味にもなる。

そんな不純な考えをよそに店内に入つて、各々注文をし始める。にしても、まさにできたばかりっていう感じのモダンな内装からして、抹茶ラテや抹茶フラペチーノのような若い子向けの「改造抹茶」しかないかと思つたが、本格的な抹茶に茶菓子のセットもあつて驚いた。かなり価格もリーズナブルだし、味によつてはこの店の常連になるかならないかの運命が早速掛かつて、私はそのセットを注文した。周りが抹茶かき氷や抹茶ケーキに抹茶ラテなど青臭いチヨイスの中、一人だけかなり渋い選択になつて浮いてる感じが拭えないが、好きなものを注文しているだけだ。

「さあ、みんな頼んだやつ来たよね？　じゃあ食べよう！」

さりなの掛け声で一斉にみんなが食べ始める。さすがにかき氷を頼んだ人は先に食べ始めているが、かなり大きなサイズだ。

「それで？ どうなの？」

さりなが聞きだした。

男子たちが気まずそうにお互いの顔を見合う。すると、

「ちよつと微妙かも……」

キウヤが言った。

「ええー！ 抹茶ビギナーでも抹茶の魅力が分かるようにスイーツ系にしたのにー！」

すかさずさりなが返す。

それをよそに私は少し残念な気持ちになっていた。抹茶が微妙ということは私が微妙ということ

とになる。私は抹茶で成り立っているからだ。心の中で大きなため息をつく。でも他にも私と同じ趣味があるはずだ。例えば音楽鑑賞など何かあるはずだ。

取りあえず今日は、キウヤが抹茶を好きではないということと、さりなは明るく社交的で周りを仕切りたいリーダーシップを発揮するタイプだと分かった。その日はカフェを出たあと、取りあえず辺りをぶらついて解散した。

次の月曜日。小糠雨の朝に、まだ少し眠たいがいつもよりも早く起きた。せっかく起きたので、今日は朝からフライパンを取り出して朝ごはんついでに弁当も作った。基本は残り物を詰めるだけだが、久しぶりに新鮮な弁当が食べられるので嬉しい。

学校に行く支度が終わっても、まだ学校に行くには少し早い時間だし、どうしようかと居間で両手を腰に当て立ち尽くすと、ふと鏡に映る自分の姿が目に入った。身だしなみが乱れていないか、ちようど目に入ってきた足元から順番に上へと確認したら、ネクタイを締め忘れていることに気づいた。

「良かった、気づけて……」

小さく呟いて言った。

私はネクタイを取りに行くために、自分の部屋がある二階に向かった。そして部屋に入り、制服を掛けていた周辺を見てみると、あるはずのネクタイがない。ここ以外で制服を脱いだり着たりしないので、どこかに消えるはずがないはずだ。

「なんで……」

疑問で思わず小さく漏れる。

私は私服でネクタイをつけないので、代わりになりそうなものはない。だがスカーフならよくつけるが、もう春なのでネクタイみたいに生地が厚めのものはすでに押し入れにしまい込んで、今取り出したとしても押し入れの匂いがするだろう。ネクタイを探しているうちに普段学校に行く時間が迫って来たので、先生に怒られる覚悟で夏服用の紅色のネクタイに近い色味のスカーフを巻いてやり過ごすことにした。

外に出て通学路を歩き、学校に着々と近づくにつれて同じ学校の生徒が増えてくる。皆首元に紅色のネクタイをゆらゆらと春風に靡かせているが、一人だけ薄手のスカーフをひらひらと靡か

せるというよりは舞わせていた。玄関に入ると、先生に見つからないように素早く行動し、無事教室までたどり着くことができた。

教室に着くと、月曜だからか、クラスメートの皆は浮かない顔をしている気がするし、なかなか人の数も少ない気がする。「せつかく私がボケを出したのに」という冗談を心の中で言いながら、取りあえず席に着いた。

ホームルームが始まる直前になってもクラスの三分の二くらいしか集まらない。例年よりも暖かい春なので風邪を引くなどはなさそうであるが、どうだろうか？ ついにはショートホームルームが始まってしまふ。そういうえば、さりなとキウヤがいない。

もし二人が休みなら、貴重な話し相手と学校生活を彩ってくれる想い人が同時にいなくなることになる。そうしたら、今日はなんとも退屈な一日になるだろう。元々一人でいることが窮屈に感じるような人ではないが、あのように趣味が合う人と話せないのなら暇だろうし、自分の恋している人がいないのならドキドキが味わえなくて、それはそれで退屈だろう。

そうして少ない人数のまままでショートホームルームが始まってしまい、先生が号令をかけ今日の日程などを黒板に箇条書きしながら説明していく。ショートホームルームが終わり、余った時

間を自由に過ごしていたときだった。廊下から誰かの話し声と、バタバタと歩く音が教室に近づく。遅刻してきた人だろうか？ 遅刻しているにしてはかなりゆったりしすぎている気がするが。

すると教室前のドアが開いて、その生徒が入ってきた。キウヤとさりなだ。それもさぞかし楽しそうに話しながらだ。

「ええ……」

思わず心の声が漏れた。

じわじわと憎悪に失意に傷心などが渋滞した信号のない交差点のように混沌と私の心の中を支配し始める。さりなに対する憎悪と嫉妬の感情はなくなってきたはずだが、たださりなが最近私に付きつきりで彼の元に行かなかったからなだけで、まだ消えていなかったようだ。

「もうやだ〜！ キウヤくんってば〜！」

普段私に話しかけている以上に元気に楽しそうに言う。

なんて腹立たしいんだ。あのくねくねとした動きは素でやっているのか？ 私にはただのぶりっ子にしか見えないが、本当に腹立たしい。もしこれで彼女が普段通りに私に話しかけてきたら、普段通りの顔ができないかもしれない。もし彼女がこのままキウヤに付きっ切りになったらなおさらだ。

本当に腹立たしい。教室の前方でさりながわざとらしくキウヤに猫なで声でくねくねと、骨のないナメクジなどの軟体動物みたいに言い寄っているのを見ているうちに苛立ちが募り、我慢の限界を迎える前にどうにかしなくてはと、教室の後ろの端でノートにさりなのフルネームを赤色で大きく殴り書き、周りを「呪殺」と黒色で殴り書いて埋めた。そのときの私の顔はきつと見物だったかもしれない。

そして私は思った。もう聞かしくない、さりながキウヤに好意を抱いているのかを。

「あつ！ みゃ〜！」

さつきとは打って変わって普段通りの、私に対する態度で近づきながら言う。

「あっ……やつほー……」

憎しみを向けたノートを見つかる前に閉じながら、気乗りしないようなトーンで言った。

「どうしたの？　なんか元気くない？」

私の事情も知らずに厚かましく聞いてくる。

「何でもないよ？　にしても楽しそうだったね」

体勢を立て直して普段通りを演じて言う。

「実はね……」

もったいぶるように口が止まる。

一体何をもったいぶっているのか？　なんとも腹立たしい。「まさか私の心の中で『女』から『ぶりっ子の鯛』に昇進したいのか？」と思わず言ってしまうのをよくも堪えられたと、心の中で私

を自画自賛しながら、意味の分からない勿体ぶりに呆れながら待つ。同時に帰って来る言葉がどのようなものなのかと緊張もしてしまった。

私の中で異様な空気が流れている傍らで、さりなは「うふふん」だとか「えへふん」だとか、気持ちの悪いぶりっ子が勿体ぶるときの効果音を発している。そして体感では何十分もあったように感じたが、実際には二、三分くらい効果音が続いた後に、やっとぶりっ子は口を開いた。

「実はねえ？ 学校に遅刻しそうになって走ってたら、曲がり角で彼とぶつかっちゃってき、それでなんかもう色々諦めちゃって、彼と話しながら歩いてきたの……。そしたら彼ってばめちゃくちや面白くって！」

さっきからの調子で話す。

なるほど、なんて陳腐な理由だ。曲がり角でぶつかり彼と仲良くなり恋してしまう……。彼女は少女漫画を読みすぎたみたいだ。

「にしても結構猫かぶってたけど、もしかして……。恋しちゃった？」

自然に聞こえるように茶化すように言った。

「ちよつとく違うわよー！」

明らかに本心を隠すような言い方である。

最悪だ。彼女は「恋敵」と書いて「ライバル」確定だ。しかも私の唯一の友達である。すべての平穩を保つためになるべくこの「愛戦」と書いて「きようそう」というのを避けなくてはならない。作戦を練るには私に付きつ切りのさりなを切り離し、一人にならないといけない。そのためには早退して家に帰るしかない。

普段抹茶の抗酸化作用とルテインのおかげで常に健康な私が、一人になるためにトイレに籠ったり、保健室に休みに行ったりと不健康になったら明らかに不自然だ。それにお節介なさりなら絶対に様子を見るからだ。三時限目が体育なので、熱中症を装って早退してしまえば自然だろう。

「はあ……体育嫌だな……すでにストレスでお腹が痛くなってきたよ……」

これは嘘ではなく本当だ。

「どんだけ体育嫌いなのよ？」

さっきのぶりっ子加減とは違い、普段のサバサバとした口調で言う。

チャイムが鳴り、体育の授業が始まる。今月はスポーツの中でも特に嫌いなバスケットボールだ。それにバスケットボールは激しいスポーツだ。あと体育館の窓が錆で開けられない箇所が多く、熱中症を装うのに好条件である。

早速準備体操として体育館を二周走る。この時点で実際はかなり疲れが出た。実際、最近はさりと沢山遊んで寝不足がちであるし、隈もあるので信頼性もある。

一試合目が始まる。男子のいない空間で猫を被ることを忘れた女生徒の激しくぶつかり合う音が体育館に木霊する。そんな中私は、激しく往来する女子たちにぶつかり、明らかに体調を崩している人を演じた。すると、案の定異変を感じた先生が試合を中断させ、先生含む全員が駆け寄ってくる。私は大げさに肩で声を枯らしながら呼吸をした。

周りが「大丈夫か？」と問いかけるが、私は一向にうつむいたままで、答えずただ肩で息をした。意識的に顔を赤らめることができたなら、より熱中症のように見えたが、そんなことはもちろんできないが、かなりの重傷に見せることができただろう。もしこれで演技がバレてしまったら、「ドラマクイーン」と呼ばれること間違いなしだろう。

そんなドラマクイーンな私は、呼ばれて駆け付けた男性職員に抱えられ保健室に運ばれる。この学校の保健室の先生はすぐに早退させてくれるという噂を聞いたことがあるので、すんなりと帰れるだろう。そして保健室について事情を説明すると、すぐに「無理しないで早退してもいいんだよ」と優しく言ってくれた。

見た感じ年が大体私の母親と同じくらいなのも相まって、母親の安心感や包容力を感じて、辛いときにそんなことを言われたら泣き出してしまう自信がある。

今世最大の演技を終え無事に早退できた私は、自分が一応体調不良者だということを忘れて大急ぎで家に帰った。家に着いたらすぐに窮屈な制服を脱ぎ、抹茶を入れて茶の間にノートとペンを用意して作戦の案を書くとする。だが、中々思いつかない。

さりなは恋敵だが私にとって初めての友人で、その関係をできれば壊したくない。でもキウヤ

を取られるのも嫌だ。その二つを両立するのは難しい。二人との関係を保ちながら私の名が汚れない方法はないのだろうか？

まだノートに向き合ってからさほど時間は経ってはいないが、もう私の脳は限界を迎えた。朝のキウヤとさりなの事件でかなりの体力を使ってしまった、ぼんやりと畳に寝転がり天井の模様の一部を見つめ始めた。

「みや」

聞き覚えのある声だ。

「みや」

聞き覚えのある声が何度も私のことを呼んでくる。

「何？」

今度はその声よりも幼い女の子の声が返事をするのが聞こえてきた。どうやらいつの間にか私

は寝ていたようだ。目を開けると見慣れた天井が目に入る。にしてもこの声の主は誰だ？ 両親は出張でいないし、親戚は皆突然訪ねてくるような人たちではないし、第一、親族では私が一番若いのでこの声の主の正体が謎である。

視線を台所に向けると、そこには親子と思われる女性と少女がいた。床には貯蔵していたであろう抹茶が入った麻袋が巻き散らされて、抹茶色に染まっていた。思い出した。

この情景は、私のカフェインアレルギーが発覚して、親戚の家に疎開させられて初めてお盆で店が休暇を取るタイミングで帰って来たときに、久しぶりに両親に会えた喜びと親戚一同が集まっていることに嬉しくて、興奮して大フィーバーを噛ましたときにやらかしてしまい、それを黙ったまま放置したのを母親にバレて説教を食らっているときの情景だ。

母は昔から今も変わらず説教をするときに感情的にならずに論すような怒り方をするが、しっかりと私が反省するまで対面で床に正座させ目を見るようにさせる。だがその目が優しい声のトーンとは裏腹にかなり真剣で、毎回すぐに私も反省したものだ。そして私が「ごめんなさい」と謝れば毎回「正直な人には絶対良いことがあるから、どんなにそばで誰かが悪いことをしていても便乗しないで、自分に正直に正義を貫きなさい」と締めくくる。

なるほど、無駄な抵抗をやめて正直にさりなに私の気持ちを言うべきなのかもしれない。

そこで私は意識がはつきりとした。いつの間にか日は傾いていて、学校では下校の時間をとつて過ぎていた。体をそつと起こして、ちゃぶ台に放置され冷めてしまった抹茶を入れ直し気分を変えようと、台所に向かうために立ち上がろうとしたときに玄関でチャイムが鳴った。

「はい」

家に訪ねてくる人なんて宅配の業者か、郵便物の配達の人くらいだけだ。そのどちらかと思つた私は、一応財布と印鑑をもつて玄関に向かつてみる。だが玄関のすりガラスに映っているのは、私の通う学校の制服を着ている生徒のようだ。玄関を開けてみると、そこにはさりながいた。

「ちよつとどういうつもり？ 一応熱さまシートとスポーツドリンクは持ってきたけど、みやつてばあんた体調不良じゃないでしょう？ だって教室からあんたが全力疾走で帰るの見たんだから〜！」

冷やかすように言う。

「ちよつと色々あつてさ……ちようどさりなに言いたいことあるし、上がつてく？」

「ごめん、私今日夕飯作る当番なんだよね。できればここで言えない？」

これは計算外だ。どうせなら家の中にさりなを招き入れ、お茶出して改まった状態で言いたかったが仕方ない。事態を勝手に自分で拗らせる前に、正直にここで言うしかない。

「さりなつてキウヤのこと……すぎ……？」

恐る恐る、慎重に聞いた。

「うわ、そういうことだと思つた！」

まるで私の言うことが分かつていたみたいに言う。

「えっ？」

「今日の朝に私がキウヤと話したときから、なんだか様子がおかしいって思つたのよ！ 安心し

て？ 私レズだから彼に恋するなんてありえないから！」

あまりにもさらつと言われて衝撃を感じる余裕がなかった。そしてさりなは続けた。

「実は入学式のときに貴方が校門の前で右往左往してるのを見て、『何この子？ 凄い美人！ どタイプ！ 仲良くなりたいうー！』って思つて声をかけようとしたの……。そしたらキウヤが私よりも先に貴方に声をかけた……。どうせレズは少数派だし彼女も違うかもしれない。それにあの男の子はとても爽やかで優しくてカッコよくて、きつと彼に恋したんだろうなあ。うって体育館の玄関でチラつて貴方の顔を見たときに思った……。それで彼にむかつて、みやからキウヤを切り離そうとして、ぶりっ子装つて近づいてただけなの……。ほんと汚いよね？ でもこれもこれで別のベクトルでやばいよね？ ほら」

そう言いながら鞆からノートを取り出し、とあるページを見せる。

「それ！ 私のじゃん！」

「あまりにもすごい顔でノートに書いてるから、どうしても気になっちゃったし、机に忘れてたから届けるついで見ちゃった！ まあ、お互い様ということでもいいんだけどね。にしても

これ書いてるときのあんたの顔マジ見物だったわ」

シリアスな内容のノートとは反面、能天気な調子で言う。そしてまた続ける。

「私の恋は叶わないけど、あんたの幸せそうな顔見るの好きだし、あんたの恋応援するよ……。その代わり絶対に告白成功させてよ?! もし失敗したら私あんたのこと喰っちゃうからね?!」

「うっ……うん……分かった!」

そうしてお互いの顔を少し見つめ合い微笑み合った後、私達は玄関先で熱い握手を交わし別れの挨拶をした。

詩部門

最優秀賞

水平線を睨んだ日

沢口リリキ／89

奨励賞

祈りの架け橋

花木 詩香／93

青年の心象スケッチ

Φ(ふあい)／97



*

*

詩部門

最優秀賞

水平線を睨んだ日

沢口リリキ

冬の冷たい日

辺戸岬の突端に行き

水平線を睨んで確かめた

あの線の向こうには

未だ見ぬ私が

呼吸を続けているようだった

人生に波風を立てないために
手放したもの

選ばなかったもの

背負えたのに見送ってしまったもの

少年時代、卒業アルバムに書いた

夢見る一行

予感に満ちた夏の日

母に打ち明けた希望

夜更けに

友と酌み交わした盃

捨て去ったもの

取り戻せなかったもの

一歩踏み込みさえすれば

掴めたかもしれないもの

あの境界の彼方には

不器用でも

安易に諦めない

もう一人の私が確かにいるようだった

海鳴りが真実の咆哮をあげ

耳をつんざく

顔から剥がれ落ち

流砂のように崩れていくペルソナ

あの青灰色の遥かには

握りつぶした明日

選ぶことができた何か

果たされなかった約束が

姿を変えずに佇んでいる

冬の冷たい日

水平線を睨んで確かめた

岬の最果てで

留まる理由（わけ）を

断崖に碎け散る波へ投げ捨て
過去も未来も現在も
すべての夜闇を越えて行く

私を愛してくれる人々

私が愛する人々の

微笑みを

唯一の帆柱（マスト）に変えて

詩部門

奨励賞

祈りの架け橋

花木
詩香

ンマリガーへ続く

黄昏の小径

薄の葉すれの奥から

松虫の音が澄みとおる

神聖な泉

ンマリガー

僕は今

親パーントウになる

キヤーンの重みで静かに異界へと沈み
泥のひと粒ひと粒が
意志を帯びて寄ってくる

面の空洞の目が語る

この宮古島に

流れ着いたあの日から

鬼を遠ざけ

慈愛の種を蒔いて

きたのだと

赤子には羽根の手で祝福を

子供には鬼ごっこを

笑い声の波が折り重なり

大人には忘れた童心を

お年寄りには長寿の祈りを

新築にも新車にも

ためらいなく祝福の泥を

海原に揺れる舟の灯りが波に砕け
金箔を散らす

泥の重みが海へ落ち

余韻が波紋となって遠ざかる

月を吸い込んだ空が黒鳶色へと変わる

薄の影が揺れる帰り道

不意に月を呑んだ夜空が

太陽の欠片を吐き出した

眩しさに片目を閉じた瞬間

白い天井がぼんやりと浮かび上がる

ああ 夢だったのか……

手にはまだ泥の重さが残り

面の向こうの笑い声が

微かに耳の奥で転がっている

僕は明日

また親パーントウになる

この島の祈りを

未来へつなぐために

※ シマリガー（神聖な泉。生命の象徴）

※ パーントウ（宮古島の伝統行事の神。重要無形文化財。ユネスコ無形文化遺産）

※ キャーン（しいのきかずら。体に巻く）

※ 面（人と異界をつなぐ境界。親パーントウ、中パーントウ、子パーントウ）

※ 鬼（災害や疫病のたとえ）

※ 泥付け（厄を祓い福を呼ぶ祈りの行為）

詩部門

奨励賞

青年の心象スケッチ

Φ
(ふあい)

果てしなく広がる 雪景色である

命の足音が途絶えた
無表情の世界

そこに独り 青年が佇んでいる

時に取り残されたように
もしくは
時から逃げるように

まだ 彼の顔ぶりには
少年のあどけなさが残る

ふうふう と息を吐く青年

彼の身体から 追い出されたそれは
真白の霧となり
ゆらゆら昇ってゆく

いつばいの白を映し
揺れる両の瞳

青年を覆う 全ての現象が
かじかんだ耳へ いっせいに囁くのだ

おまえも、白くあれ。
と

けれど青年は 凜として佇んでいる

両頬を 真っ赤に染めて
両手を ぎゅつと握りしめて

一つだけ紛れた
四つ葉のクローバーのように

あの銀世界の無機質へ
溶け込めない異物の姿

それはみじめな埃なのか
それとも彼の 誇りなのか

ふと漏れた問いは
ふわりと粉雪にさらわれて

果てしなく広がる 雪景色である
それは

レンズの向こうではなく

青年の日常に潜む ノンフィクションである

短歌部門

奨励賞

なんの未練も
大き背
ダバオの暮し
出た杭

森山	高史	101
高良	鳴海	102
安仁屋	升子	103
な	な	104



短歌部門

奨励賞

なんの未練も

森山 高史

夕暮れは抱えた秘密が胸を刺す誰も乗せない回転木馬

真つ当な暮らしをちよいと真似すればゲリラ豪雨がわたしを襲う

寝て起きて遠く過ごした二十年あなたもわたしもちよつぱり老けた

夜に咲き朝に踏まれるサガリバナもうじきひとつまた年を取る

水で割る泡盛二合午前二時なんの不服もなんの未練も

短歌部門

奨励賞

大きな背

高良 鳴海

面の笑顔と共に差し出す手ふわり握ればグツと引き寄す

若き日の活力溢れる短歌^{うた}思い車椅子に座す師の手を握る

杳き日の思いふつつ湧き上がる親子喧嘩と言われし日々の

大きな背をいつか超えんと追いかけし車椅子の背小さきは哀し

三十一の音にのせたる平安を祈る心は引き継ぎ行かん

短歌部門

奨励賞

ダバオの暮し

安仁屋升子

戦時禍を幾山越えて避難せし記憶をたぐる六歳の夏

礎にて刻銘されし姉の名にダバオの暮し甦りくる

夕べには共に肩寄せ読み聞かす優しき姉の声を忘れず

引揚げて学ぶ夢描く姉の身に安穩乞ふもマラリヤの襲ふ

気丈なる姉は時をり校門に潜ることなく十三歳^{じゅうさん}にて逝く

短歌部門

奨励賞

出た杭

な
な
み

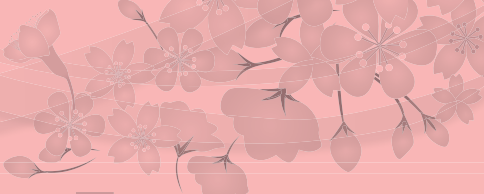
地元には沖縄っぽい人がいてままならぬままならぬを選ぶ

名護を踏みつづす施設のせいでまだ夜の散歩はできないままで

夢にいた祖父は私を抱いていて氷の涙（なだ）でシベリアを見る

「決着」が着いた露国と日本との狭間に銀の盃落とす

糺して訂して正した先にある空集合の理想人物



エッセイ部門

最優秀賞

基隆体験記

上原 愛音／
105



エッセイ部門

最優秀賞

基隆体験記

上原 愛音

大学四年生の夏休み。大学の先生のご厚意から十日間の台湾研修に参加することになった。私の中にはいくつかの不安と楽しみが混ざりあっていた。学びはじめの中国語が活かせるのか。言語の違う場所や日本や沖縄と違う文化や生活圏に行くことでどのような経験ができるのだろうか。

最も大きな不安は言語の壁であったため、一つの目標を立てた。それは、文字やその場の雰囲気、情報から言葉を探ること。漢字から言葉の意味を探ったり、現地の観光客向けガイドやネットから調べたり、ということを中心とした。思いがけず、この目標は言葉だけではない、様々な知識や気づきをもたらした。

四日間滞在した基隆は、私の知らない台湾や日本、沖縄について、歴史や文化の今日までを学ぶことのできた特に印象深い街であった。

那覇空港から飛行機、MRT、バスを乗り継ぎ、漸く息をついたのは北東へ口を開く港街。港に泊まっていたのは那覇でも見かけた大きな船。公伯泰姓呉の大きなモニュメント。西の丘にはハリウッドじらーの「KEELUNG」の文字。旧暦、七月になった街はお盆のはじまりらしく、提灯や「慶讃中元」の旗が掲げられていた。ウチカビのようなものを燃やす人や爆竹の音。沖縄との親近感と違いを一瞬にして体験した。

日も落ち始める頃には基隆奠濟宮を中心に広がる廟口夜市は見渡す限りの人と屋台がひしめき合い、活気と熱気に溢れていた。夜市と一体化した基隆奠濟宮の門をくぐれば、開漳聖王の像が本殿の前に勇壮と立ち、本殿は重厚さも持ちながら絢爛な装飾と色が細部まで施されており、忙しなく目を引かれる。日本の神社仏閣や沖縄の拝処でのやり方は異なる、現地の方が拝む姿を目にした。老若男女が訪れ、熱心に祈る女性、慣れた様子の小中学生ごろの兄弟の姿もあった。それぞれの屋台には行列ができ、さまざまな香りが交差する。その中心に、信仰の場として廟が座している空間はとても新鮮で、信仰と生活の近さを目の当たりにした。不安で、手探りをしながら言葉を交わしたり、見よう見まねで拝んだりすることで沖縄や日本との相違点を夜の基隆の街を腹いっぱい、胸いっぱい詰め込みながら味わった。

二日目はジャーナリストの方によるガイドのもと、基隆駅をスタート地点にして基隆市を中心としたフィールドワークを行った。

初日にも目にしていた古びた建物が元々鉄道の線路切り替えのための監視のための場所であ

り、その足元には当時に敷設された線路が展示として残されていた。日本統治期の建物が補修とリノベーションを繰り返して今も使われている建物も何件も見ることができた。

基隆駅から離れ「獅球峰砲台」へと向かう道中では、想定よりも勾配の大きな道を汗だくになりながら高台にある砲台へたどり着くと、眼下の街と海を臨む景色に感動を覚えた。残された砲台から砲口は広がる街とその先の海へと向けられるのだろう、と窺うことができ、ここが軍事要塞として重要な場所であることもすぐに理解できた。

ガイドの方は高台で海の方角にある小さな山を指し、「あの山の向こうが栄丸遭難事件のあたりです」と説明を始めた。少し入り組んだ基隆港を出発した後、船の不調と荒波が重なって起きた海難事故であり、栄丸の乗客は戦争が終わり、自力で台湾から沖繩へ引き上げようとした人々であり、寄せ集めの機材で整備された船だったことも原因だったかもしれないとお話された。砲台からみえる遠い海は白波もない穏やかな海で、私には乏しい想像しか生まれなかった。

砲台を離れ、基隆港の沖で起きた一九四五年十一月の栄丸遭難事件の犠牲者が打ち上げられた場所へたどり着くと、険しい岩場から徐々に岩礁に乗り上げてバラバラになったという経緯も、私の想像を膨らんでいった。そして、岩がひしめく一角にトーチカがあったことも強く記憶に残った。

故郷へ帰るために乗った船がさまざまな要因でばらばらになり、助かった人も、岸へ打ち寄せられた人も波に攫われたままの人も思っただけでも故郷へ帰ることができたら、という思いがこみ上げた。ウチカビとヒラウコー、宮古島の泡盛を供え、手を合わせた。

沖縄戦について学んできたことは多かったが、引き揚げ船に関する話は大学の講義ではじめて学び、そして追悼の場へ行くこともはじめてだった。戦後八十年の今年、戦時期を経験した方が少なくなり戦後世代が戦争の記憶を継承していく中で、追悼と学びがまだまだ必要だと実感した。体験者の言葉そのまま聞けること、残されていることが如何に貴重なことか。そして、自分自身が沖縄という地にある、戦争の様々な証言や思いや言葉について、もっと知るべきなのだと痛感した。

続けて向かった和平島（社寮島）では社寮島外嶋集善堂を訪れた。この廟は二二八事件被害者の沖縄人が納められている場所であると説明を受けた。和平島は沖縄からの漁民たちが漁業技術を持ち込んだという良い側面の他に、石花菜や生活圈の問題などのトラブルもあった土地ということを学んでいたため、今ではどう思われているかと漠然と気になっていた。廟で被害者が祀られる一方、現地の説明では沖縄漁民の像を巡る新たなすれ違いがあるということが印象的だった。現地の方の説明をたよりに、台湾の長い線香を持つて廟を拝み、台湾の紙銭を燃やす方法や作法を教わった。沖縄のウチカビと似てはいるが、大きさやデザイン、燃やす炉があることなど違いも様々あり、興味をかき立てられるひと時だった。

和平島を離れて訪れた「基隆要塞司令部」は、それまで回ってきた場所とは異なる、新たな緊張感をもたらした。

小高い丘を背に、左右対称の司令部の建物があり、その前には一九四六年に蒋介石が台湾に訪れたことを記念した碑が建てられている。この碑がもう一つ重要な点だが、二二八事件の責任を追及されえる人物たちの名が刻まれていることである。基隆要塞司令部は、二二八事件当時に鎮圧のための部隊を出動させるなど、重要な役割をもった場所でもあったため、「台湾の二二八事件への評価の複雑な面を象徴している」と非常に重要な指摘があった。続けて「国としての謝罪と国民党からの謝罪は意味が違う」と。

施設はそんな解説とは裏腹にきれいにリノベーションされ、美しい外観と壮麗で厳肅な雰囲気をつらぬいていた。展示場では見覚えのあるレトロ看板やパネル資料が展示されていた。その中には、かつて米兵を相手に商売をしていたとされる台湾の人々と米兵たち交流の写真からは、どこことなく沖縄の復帰前を写した写真と似ていた。

隣接する施設はかつての日本式家屋の保護展示と芸術作品の展示と販売がされる文化の場所となり、私たちに癒しを与えてくれた。日本式家屋である基隆要塞司令官邸や清仏戦争祈念園区などにも立ち寄り、かつての歴史的建造物の保存や活用、慰霊の場に対して、熱心な活動を何度も感じることとなった。

三日目。この日は市内から離れて、金瓜石と九份での活動が予定された。私は、基隆の街を知りたいという思いのまま集合までの時間を利用して、昨日回った基隆駅周辺の施設を一人でもう一度回ることにした。解説を聞きつつも、足早に通り過ぎてしまった建物や場所へ立ち寄り、改めて発見した解説パネルを読みながら基隆駅の周辺を散歩した。だんだんと暑くなっていく外気

に汗を拭いながら、街にあふれる看板や広告、標識の文字や言葉を拾い集めた。

ところどころ、解説パネルをみているうちに「日據時期」と「日治時期」と二つの表記がされていることに気づいた。調べてみると、この二つの言葉の違いは日本統治時代の台湾が「占領・占拠」されていたと捉えるか、「統治」されていたかと捉えるかという違いがあることを知った。それまで気に留めていなかったが、決して些細な言葉ではなく、非常に重要なことだと悩んだ。私自身が今までに台湾がかつて日本だった時代をどう受け止めているかを考えたことがなく、それを考えられるほどの知識がないということに気づいたからだ。知らないだけでは済まされない、そのような言葉が心に刻み込まれた。

四日目。この日は基隆から離れる日だった。

私は基隆の景色を憶えておこう、と再び一人で基隆の街を歩いた。港の景色、西の丘のKEELUNGの文字や慶讃中元の旗は今でも鮮明に思い出せる。

基隆を離れた後、私たちは台北や台中に滞在しながら現地の大学生との交流やフィールドワークを行い、様々な経験をし、刺激を受けることとなった。目を逸らしてはいけない歴史。継承するということの難しさと模索。豊かに繋がれる楽しさ。帰沖後、台湾で目にしたこと、肌で感じたことが色あせる前に様々な言葉を思い起こしながら振り返った。

思い出にも鮮明に残っていた、基隆の街に掲げられていた「慶讃中元」の旗について、とある文献で小話を見つけた。台湾の一部地域では「慶讃中元」の文字のある紅の旗は海上の守護符として尊重されていたらしく、手にしたものは高値で売りつけることもあったり、ある時は奪い合っ

て死傷者を出したこともあつたりしたらしい。基隆のあの港町では、そんなこともあつたのだからか。

もう一度、あの街に行きたい。私が見た景色に、様々な想像が重なって膨らんでいる。

俳句部門

最優秀賞

ニライカナイ

津嘉山 典／113

奨励賞

蓮魂譜(れんこんふ)

地球一輪

明鏡止水

琴森 友利 玉那覇
戀／114
正／115
尚／116



*

*

俳句部門

最優秀賞

ニライカナイ

津嘉山
典

雲間より揺蕩ふひかり月朧

川底の輪廻蠢く蝌蚪の紐

朝風やニライカナイへ舟の滯

たたなづく青垣へ架く秋の虹

日溜りへ天衣無縫に木の葉舞ふ

俳句部門

奨励賞

蓮魂譜（れんこんふ）

琴森

戀

厨子甕ずしがめに蓮花れんがひらく龕がんゴウ祭さい

蓮の骨頭こつづを垂たれて古老こらうかな

枯蓮や幻視の絵画ルドンなり

蓮根堀土はすねほりの香かに聴く地層ちそうかな

蓮浮葉水面はすうきはに映る君が魂

俳句部門

奨励賞

地球一輪

友利

正

沖縄広島長崎忌の先に

短夜や老萬式千の核眠る

綺羅星の聖夜を進むウラン船

着膨れて釦手種ぐさに核ボタン

地球一輪月一輪の劫初哉

俳句部門

奨励賞

明鏡止水

玉那覇
尚

花篝魚影を纏う和船かな

反橋の底の光織る緋鯉かな

爽籟の湖月に触れて柿揺るる

月昇る棚田を目掛ける鶴の影

冬涛の磯飲み泡飛ぶ暮れの端

琉歌部門

最優秀賞

過れし面影

前原 武光／117

奨励賞

斗搔ぬ御祝
親ゆ偲ぶ
思里の匂

あさと愛子／119
大城 和子／121
比嘉 道子／123



*

*

琉歌部門

最優秀賞

過れし面影

前原 武光

沖縄戦場の御霊弔ひや
うちないくさばぬ みたまとうむらい

平和世とつなく心さらめ
へいわゆとうち くるみ

涙声よ立てて哀れ泣き明かす
なみだくいゆたていてい あわりなちあ

思まぬ死に別れ百の苦つさ
う しまぬし わかりむ ぬくち

乱れ荒れ果てる今の世の中に
みだりありはてい なまぬゆぬ

真肝願かける世界の平和
まぢむがん けしけぬへいわ

八十路越す舟の艫の方見れば
潮花咲きほこる船路こころ

極め果て知らぬ宇宙に照る星に
過れし面影よ語る今宵

琉歌部門

奨励賞

とうかち
斗搔ぬ御祝 うゆえ

あさと愛子

とうかち
斗搔ゆ迎ける ゆかる日ぬ御座に
孵すでて御真人うまんちゆと 平和願にがら

ゆに
米ぬ年迎うしんける ゆかる日に皆みなと
平和願にがげ上あぎら 言葉ことば繋つなじ

斗搔ぬ御祝うゆえ 親族えいうちすりて
御座照ていらち世界報ゆがふう 踊うたうい華はち

十五夜ぬ月んじゅうぐや ちち 照りまさる今宵てい くら ゆい

斗搔ぬ御祝 済しまち眺み

今宵十五夜ぬ ゆかる日ぬ月や

斗搔ゆ済まち 眺みちゆらさ

琉歌部門

奨励賞

親ゆ偲ぶ

大城
和子

まりまりに出合^いち^やる てんさぐぬ花に

ニライカナイぬ 親ゆ偲^しぬ^ぶ

太陽^{てい}だ^う落^おち^て後^あと^ろん 鳴^なち^ゆる^ぜん^ぜん^に

限^かし^りある^めいと 思^{おも}い^しん^た

明^あき^がた^す方^かぬ^すら^ぬ 星^{ほし}ゆ^み見^み上^あぎ^りば

往^ゆかる^ひにな^なさ^な 我^わ身^みに^かた^る

新北^{みにし}風ぬ吹きば ぬがなあながちさ

両親^{ふたのや}ぬ言葉^{くちうば} 肝^{かん}に浮かぶ

渡海^{とうけ}や隔^{ひざ}みていん 生^{なま}まり島^{しま}やりば

親^{おや}ぬ面影^{おもかげ}とう 友^{とも}ぬ姿^{すがた}

琉歌部門

奨励賞

思里の匂

比嘉道子

枕並びやに語る人居らむ思里の匂袖に残て
マシナラ カタ ヒトウウ ウミサトウ ニワイシイヌク

村の守り神旗頭清らしや細工師の技よ空に立たさ
ムラ マム ガミハタガシチュ テイグマー ワシヤ スラ タ

選評

小説部門

小嶋 洋輔／125

玉代勢 章／130

赤星十四三／134

詩部

西原 裕美／137

短歌部門

久保まり子／140

エッセイ部門

小嶋 洋輔／144

小番 達／147

俳句部門

おおしろ建／149

琉歌部門

波照間永吉／152

照屋 理／155

*

*

第六回名桜文学賞選考経過及び選評

【小説部門】

今、何を、誰に向かって書くのか

小嶋 洋輔

第六回名桜文学賞は、応募期間を二〇二五年九月一日から一月二八日までと、例年より長く設定した。結果八編の小説作品が寄せられた。その小説作品を、選考委員三名で審査し、最優秀賞一編、奨励賞二編とした。選考の経過は以下の通りである。

選考委員…赤星十四三（作家）、玉代勢章（作家）、小嶋洋輔（名桜大学教授）

・八編の小説を選考委員各自で読み、首席、第二席（場合によっては第三席）を選出
・一月二五日（土）に沖縄県市町村自治会館会議室で、選考委員会を開催し、それぞれ講評を行った。そして審議の結果、最優秀賞一編、奨励賞二編、とした。

今年度は名桜文学賞の締切を、他の文学賞の締切と時期をずらして設定したことが良かったのか、応募作品数が八編と多少復活した。他文学賞においても小説部門の応募数が減少傾向にあるようなので心配していたのだが、旧に復したというところである。

最近よく考えることなのだが、現在小説というコンテンツはどのような状況におかれているのだろう。それに携わる研究者でありながらよくわからなくなることが増えている。私が研究対象としている高度経済成長期の小説は、近接のジャンルに拡散する端緒は見えつつあったが、小説とはこういうものである、といった「定義」というか各人共通の部分がまだしつかりとあったように思う。ただ数多あるコンテンツと小説が並びレジャーとして消費される現在、何を、誰に向かつて書くかということが、一人一人の書き手によって大きく異なるようになってしまっている。名桜文学賞のように世代を超えて応募がなされる文学賞では、選考の際にそれが大きな問題になる。今回の本文学賞の投稿者の年齢を確認すると、今回も一八歳から八二歳となっている。

そのなかで我々三名の選考委員が共通して持っている「基準」のようなものを、わざとくだけたかたちで述べるならば、「リアルかどうか」ということと「グッとくるものがあるか」ということになる。リアルということは現実を写せとか、そういうことをいっているのではない。架空の世界の話でも、人間が描かれる以上、そこで生きている人間の思想、行動に違和感がないかという意味でのリアルさである。「グッとくるものがあるか」というのも、これは多分に主観的な部分が多くなるので説明が難しいが、ストーリーを追うことができなければ、「グッとくるところ」も生じ得ないといえるだろう。

今回最優秀賞となったのは「芋家族」、奨励賞となったのは「恋敵（ライバル）深緑の和解と友好編」、そして「三人娘譚」であった。八編中三編に賞を与えるということに抵抗もあったが、名桜文学賞の小説部門が、他県内文学賞の登竜門的な位置づけを目指しているところなのでそれもよしということになった。この三作品は、ある程度リアルであり、「グッとくるところ」も多く見られた。ただ本文学賞は応募作品の中で順位ということもあるので、正賞であっても、「まったく問題なし」の作品が選ばれているわけではない。今後、さらに書き続けていっていただければと思う。

最優秀賞「芋家族」は、タイトルからしてユーモアにあふれている。とても面白い小説であり、感動的な小説であった。夜勤専属のタクシー乗務員であった稔が、新型コロナウイルスのパンデミックを機に七〇歳を過ぎた母の芋畑を継ぐという物語である。芋畑の作業の風景はリアルであり、門外漢が新たな場に移り、そこで困難に遭うという筋立ても安心感があった。最初は反対の家族も次第に理解を示すというストーリーも同様である。「よくある」といったらそれまでだが、そうした安定感のあるストーリーに、細かすぎるほど描き込まれる芋畑という構図が新鮮で面白かった。とくに収穫のシーンは祝祭的な雰囲気がとてもよく描けているといえる。

ただ、そのリアルさが逆に欠点になってしまっている箇所も散見された。たとえば、作中の人物が使用する琉球語はリアルであり、それを共通日本語文の読者に自然に意味を伝えようという工夫も評価できる。だが、七〇歳を過ぎた母親がいる稔はおそらく四十代であり、このように流暢に琉球語を駆使して会話ができるかが疑問視された。母との会話がこのような流暢な琉球語で

の会話であることはあり得たとしても、幼友達との会話は、二〇二六年現在あり得ないのではないか。コロナ禍という時代性を取り込むために、四十代の主人公としたことが、私が四十代ということもあり強い違和を感じた。また、トリクスターの人物として描かれる大城という老人がもう少し悪役でもよかったのではないかという意見も出されたことも付言しておく。

奨励賞は「恋敵（ライバル）深緑の和解と友好編」、「三人娘譚」である。まず、「恋敵（ライバル）深緑の和解と友好編」は、陰キャの女子高生の一人語りで、その恋模様が描かれる小説である。みやというこの主人公のキャラクターづくりがうまくいっていて、一人語りも破綻なく、安心して読み進められた。十六、七歳の女子高生特有といってよいのかわからないが、ぐちゃぐちゃとして矛盾した内面がとてよく描けている。抹茶やスマホのサブスクから流れる音楽といった小道具の使い方も上手で、比喻も上手い。もう少しシリアスなテーマで読んでみたいと感じさせる書き手であった。

だが、ストーリーが今後の展開を予期させるものであったため、結末に至る展開が急であると感じた。ある種ラノベ的というか、マンガ的というか、そのどちらかの第一巻のエピソードだったのが急に終わってしまったという印象である。短篇小説というジャンルを勉強するとよいかもしれない。

「三人娘譚」もまた、詰め込み過ぎているという感想を抱いた。テーマは重く、この作品で描かれた時代、人物はいつか描かれるべき時代、人物であった。ニンブチャーに焦点を当てた作品は少ない。とくにその実像に迫ろうという小説は管見に入る限りではあるが、ないといってもよ

いように思う。また、戦前に大阪の紡績工場へ移住する「私」の人生もまた、これまでの沖繩の文學でフォーカスされてこなかった人生といえる。だからこそ、「私」、父ちゃん、そして、ウト、ハルはそれぞれじっくり描き込んでほしかった。それぞれがそれぞれの短編小説の主人公になれる存在である。そしてできればそれを三人称で語る語り手に語りを任せるかたちで書いてほしい。地の文の風景描写などが生きることになるはずである。

最後に、本章の応募原稿の体裁に統一感がなく、それぞれで作ってこられて毎回驚かされる。応募要領には「ワープロ原稿は、一行三〇字×四〇行を目安にA4判のマス目のない紙に縦に印字する」とされている。応募者は確認されたい。

（こじま ようすけ／名桜大学国際学部 教授）

【小説部門】

家族・半生・青春 描く

玉代勢 章

☆名桜文学賞「芋家族」田中直次（社会人）

①題名がいい。奇抜だし、ユーモアがある。内容にも沿っている。多くの応募者は平凡でありきたりの題名を付けたたり、内容と合わない題名を付けたりする。題名は百点満点の中で三十点の位置を占める（大城立裕さんの発言）。②登場人物が個性的で躍動している。特に芋作りを指導するアル中の大城進がよくできている。③芋家族は貧しいが喜びあふれる家族だ。ほのぼのとしていて胸を打つ。④物足りないところがある。例えば大城進に対する怒り、戸惑い、不信任に対する、もう一步突っ込んだ手当てが必要だ。

☆奨励賞「三人娘譚」高柴三間（社会人）

三人姉妹の幼少時（一九三〇年代）から中年（一九七〇年代）までの苦労の多かった半生Ⅱ多くの悲しみと少しの喜びを描いている。

三人は大阪紡績工場へ就職したり沖縄戦に遭遇したりして離ればなれになった。中年になって

奇跡の再会をはたす。しみじみとした味わいがある。だが……。①時間枠が長すぎて緊張感がそがれる。時間枠は短く！ ②主題が多すぎて（父の愛、姉妹愛、貧困、差別、宗教……）感動が薄く平たく散ってしまう。一つか二つに絞れ！

☆奨励賞「恋敵（ライバル） 深緑の和解と友好編」 Catherine Valentine-Heart（高校生）
高校生三人（女・男・女）が登場する。恋の駆け引きだ。軽いタッチの青春小説である。

小説の技術として極めて高い水準にある。人物造形、心理描写、話の展開、結末の大逆転が素晴らしい。

だが弱点がある。中身が軽すぎる。人間の絆の奥にあるものとか、人生どのように生きるのか、現代社会に横たわる病巣をえぐるとか、重い主題に挑戦し格闘してほしい。

作者は高校生。驚いた。頼もしい資質だ。今後もっと視野を広げて、社会、政治、歴史、文化、環境、沖縄……に関心を向けてほしい。多種多様の、昔の、今の小説を読んで発見し体得してほしい。きつと飛躍できる。

☆空の上の雲（社会人）

①登場人物が多すぎる。夫婦ふたりに絞れ。②時間枠が長すぎる。七十年に渡っている。一週間、一カ月など短い枠を！ ③視点がありふれている。目新しい、独自性に富む、読者が予期しない驚愕の角度で描け。

☆その腕にぶら下がってもいいですか（社会人）

大学生同士の恋愛を描いている。①性欲、愛、劣等感など鍵になる感情が抽象的だ。言葉、ただ。軽い。具体的に、なまなましく、激しく描け。②出来事が多すぎる。三つくらいに絞って濃密に深く描け。③時間が中学校、高校、大学と長すぎる。薄く平たい。大学だけ、しかも一週間など短い時間に絞れ！

☆残香（社会人）

淡白な男女関係を単線で浅く描いている。淡白を淡白に描いてはいけない。逆に粘つく筆致で濃密に濃厚に描け。淡白な男女関係を複合的に多重的に、そして深くえぐれ！

☆朝の哀しみと星の光さん（社会人）

神ダリーリした女性の苦闘の物語。予言、ユタ、前世、生まれかわりなど超現実的世界が柱だ。①その超現実的な世界を実在感と臨場感あふれる筆致で具体的に描け！ ②時間枠があまりにも長すぎる。時間枠は思い切り短く設定して、その短い時間を濃密に深く！

☆ウミとヤマトの約束（大学生）

宮城ウメが十代だった一九四五年から死亡する二〇二五年まで山田茂（大和兵）[◎] 沖縄戦で死亡を慕い続ける物語だ。①時間枠が長すぎる。②重要な場面で状況説明がない。

※題名は「ウメとヤマト兵の約束」を誤記したのではないか。題名と内容が繋がらない。

(たまよせ あきら／小説家・文芸評論家)

【小説部門】

多士済済

赤星 十四三

名桜文学賞も第6回を迎え、今回は小説部門に八作品の応募があった。昨年は四編の応募だったから、倍になったのは嬉しい。今回も気合を入れて審査に臨んだ。

最優秀賞に田中直次さんの「芋家族」が選ばれた。令和の世に「芋家族」である。なんだかほつとする。こういったタイトルは思いつきそうでもない。書き手の非凡なセンスを感じた。タクシー運転手の真栄城稔は、仕事に見切りをつけて母親のヤスの芋畑を手伝うことにした。コロナの渦中の頃だ。そこに大城という男が現れ、頼んでもいないのに、余計なアドバイスをしてくる。この大城というキャラクターが面白い。やたら偉そうで、でたらめなアドバイスをして、周りの人間を引きずり回す。彼がトリックスターの的な動きをして、物語が進んでいく。一見悪人のようだけど、憎めない部分もあり、その塩梅が絶妙だった。

キャラクターもいいが、方言でなされる会話が作品の最大の魅力だろう。おそらく主人公は四十代くらいの設定のはず。今時の四十代がこれほど方言を使いこなせるとは思えないが、読んでいると、そんなことは些末なことに感じてしまった。彼らのそばにいて、家族の会話を拝聴し

ているような心持になった。方言を作品に染みわたらせるといった技術は、年配の書き手にしか出せないだろう。農業に専念して暮らしていけるのかとか、つつこみどころもあるけれど、作品の熱量がそれを凌駕した。

奨励賞の「三人娘譚」は文章に魅かれた。「ですます調」で始まる文章に、書き手の企みを感じた。小説は絵や音に頼ることはできないため、文章力は何より大事だ。いったいどこへ連れて行かれるのか、わくわくしながら読み進めた。

戦前の沖縄で三人娘を育てる父親は、時々ニンブチャーの仕事を請け負った。ニンブチャーとは葬式の場に現れ、嘆き悲しむ者を指す。実際、そういった仕事が戦前の沖縄にあったのだろうか。私はニンブチャーの物語をもっと読みたかったが、ストーリーは戦中、戦後へ進んでいつてしまう。審査会でも指摘されたが、短編で展開するには、話が広がりすぎてしまった感があった。ニンブチャーの物語に絞ってもよかったのではないか。また、どうしてもこの作品を書きたいといった熱量が、最優秀賞と比べると低いように思えた。

もう一つの奨励賞は高校生の作品だ。「恋敵（ライバル） 深緑の和解と友好編」は若い人にしか書けないタイプの作品で、書き手のパワーに圧倒された。

弱点は多々ある。主人公の八部みやは、カフェインアレルギーにも関わらず、毎日抹茶を摂取する。そもそも、実家は抹茶製造販売の仕事をしているため、遠くの親戚の家に住み、小中時代を過ごした。高校生になったとたん、実家に戻ってきたが、アレルギーは治ったのだろうか。

特筆すべきは、矛盾点や強引なオチなど、引くかかる点がいくつもあるのにも関わらず、楽し

く読めたこと。これは作品に力があるからだ。最後まで読ませたら、作者の勝ちだ。伸びしろがある書き手なので、できれば書き続けてほしい。

他の作品まで触れることができなかったが、印象に残ったのは「朝の哀しみと星の光さん」、「ウミとヤマトの約束」、「残香」など。どの作品も独自の世界観があり、興味深く読ませてもらった。今後に期待したい。

(あかほし としぞう／小説家)

【詩部門】

詩部門選考について

西原 裕美

今回は詩部門に三十四作品の応募があった。学校の生徒の作品を送ってきた方が居たことで、多い作品数となっている。しかし、それを除いても応募者は昨年よりはやや多い。

一読したのみで私の中で最優秀作品は決まっていた。それでも自分自身の見方や考えが偏っているのではないかと懸念しながら選考会に参加した。しかし、他の選考委員もこの作品を高く評価してくださっており、満場一致で最優秀作品は決まった。

最優秀作品は沢口リリキ「水平線を睨んだ日」である。作品の中にある「人生に波風を立てないために」手放したもののや選ばなかったものの、背負えたのに見送ったものに対する思いが描かれる。それはおそらく水平線の向こう側の世界（おそらく沖縄以外の場所）にある。そして詩の存在は、水平線を眺めるのでもなく、焦がれるのでもなく、「睨む」のだ。詩の中では水平性の向こう側の世界を「睨み」ながらも、足元には留まる理由を携えている。それはおそらく今まで抱えてきた「愛」の関係性（おそらく手放せない人間関係）であり、自分にとって船の帆柱（マスト）のようなものであり、その選択は人生の *mass* でもあったのだろう。たった3ページの原

稿の中に込められた、飾りすぎないが丁寧な言葉で紡がれた詩篇に非常に惹きつけられた。そして読後は自分自身の叶えられたものと、叶えられなかったものを思い起こさせる。久しぶりに読んでいて感動する作品に会った気がして心が震えた。

奨励賞は花木詩香の「祈りの架け橋」である。宮古島で行われる厄払いの伝統行事「パーントウ」を描いている。「親」パーントウで泥を塗って歩く様子が躍動感たつぷりの表現で描かれる。最後は、「夢だったのか」としながらも、「親」パーントウとして生きていき、命を繋ぐこと、未来を繋ぐことへの想いが余韻として残されている。表現したい意図するところを考えるとパーントウが「子」ではなく「親」であることの必然性を感じる。描く力が非常にある作品で、最後は思わず笑顔になってしまふような余韻まで残してくれている。

奨励賞Φ（ファイ）の「青年の心象スケッチ」は、青年の「白くあらねばならない」という外的なものからの圧力と、そうはなれなさが「誇り」なのか「埃」なのかという心象の揺れを描いているように感じられる。表現の仕方として、行間の開け方が効果的なのかと疑問もあり、最後の「ノンフィクションである」という表現が必要だったのか、詩の締め方として効果的かどうかなどの課題はあるように思うが、一つの世界観を描き切っているという点において評価できるのではないかと思う。

そのほか、最終選考には星仲朔月「運命」、上田真弓「林檎の月」、大城燦歌「最後の呼吸」、安里和幸「錠剤色の曇天」、城間真緒「未来へ」が選ばれた。最優秀賞は選考委員の話し合いですぐに決まったのだが、奨励賞に関してはどの作品が良いか非常に迷った。それはどの作品もあ

る程度、詩を書く力があるということである。一長一短あるため、どの側面を評価するかということは非常に難しい。最終選考に選ばれなかった作品でも気になるものもあった。

今回の応募作品の作者の名前を眺めてみると、初めて知る方もいるが、非常に懐かしいと感じられる人の名前もあった。また幅広い年代の方々が応募してくださっていることも嬉しく思う。人生の中で起きる様々な体験を取りこぼさずに描き続けてほしいと願う。

(にしはら ゆみ／詩人)

【短歌部門】

久保 まり子

第6回の今回、短歌部門には二十四名の方からの応募があつた。応募者には、お若い方から人生の先輩方までおられ、作品からはさまざまな人生が感じられた。その方に見えている景色、心に浮かんだ思いが表れている歌ばかりであつた。審査にあたつては甲乙つけがたく、審査員の中でも意見が割れ、最終的に最優秀賞は該当なし、奨励賞を四名に、と決まつた。奨励賞作品の中から一人一首ずつを紹介する。

奨励賞 「ダバオの暮らし」 安仁屋 升子（あにや ますこ）

礎にて刻名されし姉の名にダバオの暮らしよみがえりくる。

礎（いしじ）、これは糸満の「平和の礎」のことである。平和の礎にお名前が刻まれているということは、太平洋戦争での沖縄ゆかりの戦没者、この歌に詠まれているのは沖縄の島ではなくダバオという遠い異国の島で幼い日、共に暮らした姉のことである。礎に刻まれた名を見ただけで思い出す姉との異国での暮らし、勉学の希望を持ちつつ伝染病にて早逝した優しい姉のことを伝えたいという熱情が迫ってくる、歴史の一ページを見させていたのだいたかのように感じた。作

者の主観が強く、残念ながら読む側に細部が伝わりきれないところもあるが、連作として評価された。

奨励賞 「大きな背」 高良 鳴海（たから なるみ）

若き日の活力あふれる歌想い車椅子に座す師の手を握る

短歌の師匠と作歌主体との年月、その関係性を詠んだ一連である。大人が大人と向き合い、敬意をもって接しつつ、超克と継承を願う。情景が目には浮かび、長い年月、その溢れるような想いが凝縮され、師弟のドラマを彷彿とさせる。一方、タイトル作でもある「大きな背」について結句、特に「哀し」は他の表現はできなかったのだろうか、という意見があった。

奨励賞 「なんの未練も」 森山 高史（もりやま たかし）

夕暮れは抱えた秘密が胸を刺す誰も乗せない回転木馬

美しい情景。夕暮れ、誰も乗せてない回転木馬、動いてるのか止まっているのか、何か少し寂しい中、心に抱えた秘密が胸をえぐり刺す。他の歌も含め、生活の中のちょっとした情景を詠ま

れた一連で凡庸に近い表現も含まれるものの、幸せではないと言い切れるほど不幸せなわけではない、でも凄く幸せかついていうとそうでもない、というような曖昧な感じを捉えたところが評価された。

奨励賞 「出た杭」 ななみ

夢にいた祖父は私を抱いていて氷の涙（なだ）でシベリアを見る

シベリアと氷という連想を深める表現で沖縄の地から遠い異国に思いを寄せ、祖父が私を抱く腕、祖父と私の悲しみを体験させられるような歌である。一連の歌は地域性と社会、歴史とを踏まえつつ、確かな主張のある歌と見た。定型内での句またがり、技巧的な言葉遣いに新しさや可能性が感じられた。「銀の盃」などの寓意が伝わりにくい、五首の歌とタイトルとのつながりが今一つ理解しがたいとの意見もあった。

表彰式当日の選評の中で私は生成AIと作歌についても少し話をさせていただいた。名桜文学賞の審査、選考は機械による評価を行っておらず、他者、人の心を動かすか、というのが文学であり芸術作品であると考えている。今のところ私自身はAIを使って歌を作ることはない。が、辞書を引きながら作ることにはあり、インターネットで調べながら作歌する経験も確かにある。生

成AIの利用も私の理解ではその延長線上にあり、表現を磨きあげるために使用することも（今はなくても）将来はあるのかもしれない。しかし、あくまでも作るのは人、そして作品を読むのも人、というところは忘れないようにしていきたい。

今回、審査をさせていただき、心動かされる歌に出会うことができたのは大きな喜びであった。奨励賞に選ばれた方々、また選ばれなかった方々、歌を作り始めたばかりの方、長年歌を作ってきて人にどう読まれるのか気になる方も、よろしければ来年の名桜文学賞にご応募いただければと願う。

（くぼ まりこ／歌人）

【エッセイ部門】

「私」との距離

小嶋 洋輔

第五回名桜文学賞（エッセイ部門）は、応募期間を二〇二五年九月一日から一月二八日までと設定、結果八編のエッセイが寄せられた。その作品を、選考委員二名で審査し、最優秀賞一編とした。選考の経過は以下の通りである。

選考委員・小嶋洋輔（名桜大学教授）、小番達（名桜大学教授）

・八編のエッセイを選考委員各自で読み、首席、第二席（場合によっては第三席）を選出
・一月二六日（月）に名桜大学付属図書館会議室で、選考委員会を開催し、それぞれ講評を行った。そして審議の結果、最優秀賞一編とした。

また今回もこの選評において、「エッセイとは何か」ということを書かなければならない。今回の応募作には、どう見ても小説という作品がいくつかあった。

エッセイというジャンルを評価する軸として私が重要と考えているのが、出来事を体験した

「私」がどのように描かれているか、ということである。アカデミックな研究論文は客観性を重視するので、主観である研究者の「私」は極力表出させてはならない。それに対してエッセイは、出来事に対してある程度の調査を書き手が行ったとしても、体験者である「私」が出てこない面白くない。そして、この体験者である「私」を、今まさに文章に起こしている書き手である「私」がどのように客体化しているかが問題のジャンルなのだと思う。今回最優秀賞に選ばれた「基隆体験記」は、ひと夏の「私」の体験が客観的に描かれた作品であった。

「基隆体験記」は、大学四年次の夏休みに筆者が参加した台湾研修の思い出、とくに基隆での出来事が書かれたエッセイである。筆者にとつて初めての体験から得る新鮮な感動が、とても素直な筆致で綴られてゆく。とくに冒頭にある基隆廟口夜市の描写はみごとである。まず筆者は夜市を「見る」。屋台、奠濟宮（ティエンジージョン）内の像、本殿。筆者の移動が文章で再現されている。そして次に筆者は「嗅ぐ」。町の香を描こうというこの試み、もう一文ほしかったところであるが、語感を作って記憶を再現しようという意図が明確に伝わってくる。筆者の体験を読者が追体験できる場面である。

新鮮な感動として描かれるものに、「戦争の記憶」、「二二八事件」といったものがある。それらに関する場所や解説から得た感動を忘れないように筆者は、集合時間のギリギリまで基隆駅の周辺を探索し直す。この場面は本エッセイにおいてとくによい。これは自身の感動を、自身の内面深くに定着させようという作業に見える。そしてそのまた外側に、その体験を客観的に記そうという本エッセイがあるという図式になっているのも面白い。「知らないだけでは済まされない」

という筆者の感慨も重く響く。

本賞エッセイ部門も六回目ということである。選考委員会の柱であつた吉川安一先生がいないことの大きさを痛感する選考となつた。後進の育成をいつも気にされていた吉川先生のことだから、奨励賞を出さない我々に天国で怒っているかもしれない。だが、エッセイは決して短い小説ではないことを指摘するため必要であると判断した。

（こじま ようすけ／名城大学国際学部 教授）

【エッセイ部門】

小番 達

今回のエッセイ部門には八作品、下は一〇歳代、上は八〇歳代と幅広い年齢層からの応募があった。この中から最優秀賞一作品を選出したものの、残念ながら奨励賞に該当する作品を選出するには至らなかった。

最優秀賞を受賞したのは「基隆体験記」である。台湾北部の港湾都市・基隆^{キールン}に四日間滞在した折の様子を綴ったものである。この作品でまず注目したのは、確かな観察眼に支えられた情景の描写力である。書き手の視点をもとに街や建物、その集う人びとの様子が、聴覚や嗅覚から得られた情報を交えつつ、臨場感を伴って表現されている点が優れている。

また、様々な場所を訪問することで台湾における異文化を体験するとともに、日本、特に沖縄との文化的な近さを感じる。その過程で沖縄と台湾が辿ってきた過去と現在の結びつき、つまり歴史が今へとつながることを認識する中で書き手の胸の裡に去来するさまざまな思いが丁寧に記載されていることも評価できる。たとえば、解説パネルにあった「日據時期」と「日治時期」という二つの表記が、日本統治時代を台湾の人びとがどのように捉えていたかの違いに依ることを知る（二つの表記の違いに留目し得たのも、右に述べた高い観察力によると言える）。そこで言葉のもつ重み、その言葉の背後にある歴史の重みに気づいたという。

これまでの選評の中でも繰り返し指摘してきたことであるが、エッセイを書く際に求められる

大切な要素として以下の三つがあると私は考えている。一つは誰もが見逃してしまうような些細な出来事、事物に注目する「観察力」、もう一つはそこから自身の思いや考えを展開、深化させていく「思考力」、そして、その思いや考えを読み手にわかりやすく伝える「文章力」の三つである。これらの三要素をバランスよく兼ね備えていたのが本作品であった。一方で、これら三要素のいずれか、或いはいずれもが十分ではない作品が多かった。これが奨励賞作品を選び出せなかった理由である。

『基隆体験記』は筆力・内容ともに最優秀賞に相応しい作品であるが、今後への期待を込めて、あえて課題をあげるとすると、校正が甘い点である。助詞の誤りや「の」が繰り返されて冗長な文となっている箇所、句点が脱落している箇所が気になった。校正には十分時間をかけてもらいたい。この校正の甘さということでは、今回の応募作品の多くにも当てはまる。誤字（変換ミス）や脱字、表記の不統一、「」や『』の用い方の誤り、主語・述語や係り受けのねじれ、改行に伴う行頭の字下げがなされていない等が見受けられた。また、校正とは異なるが、タイトルの付け方にも留意してもらいたい。本文の内容と合致しないものがいくつかあった。

最後に、受賞された方も、選外となった方々も更に研鑽を積み重ね、今後もぜひ書き続けてもらいたい。継続は力である。そして、本文学賞へ応募してもらいたい。次回も多くの作品に出会えることを楽しみにしている。

（こつがい とおる／名桜大学国際学部 教授）

【俳句部門】

おおしろ 建

俳句部門の応募は三八作品であった。高校生の応募が多数あつて頼もしく感じた。俳句部門は五句で一作品の応募。審査は詩・短歌・俳句の審査員の三人で行った。審査は作者の名前を伏せて行い、各審査員がそれぞれ、一位から三位までを推薦する。挙がった作品を論議した。

最優秀賞 「ニライカナイ」 津嘉山 典（つかやま のり）

《川底の輪廻蠢く蝌蚪の紐》。「蝌蚪」は「おたまじゃくし」のこと。蛙の卵は寒天質の紐状の中に包まれる。これが「蝌蚪の紐」である。やがて孵化し大量のおたまじゃくしになり、成長して蛙となる。そして卵を産む。川底ではこれらがくり返される。その様を「輪廻蠢く」と表現する。「蝌蚪の紐」から繋がる命の物語が川底では繰り返されている。

《日溜りへ天衣無縫に木の葉舞ふ》。日光がさして暖かい日溜まりに木の葉が降っている。だが、その木の葉は天衣無縫に舞うという。静かな中に無邪気な動きを感じさせるのが良い。

《朝風やニライカナイへ舟の漑》。海の彼方にある楽土のニライカナイ。そこに向かつて波のない真っ平らな海面を舟は進む。水平線の彼方まで舟の通った跡が一本続いているのである。

《たたなづく青垣へ架く秋の虹》。澄み渡る秋の空に虹が架かる。幾重にも重なり合った青垣の上に、虹はさらに重なり架かる。幾つもの景が重なりダイナミックで美しい光景である。

奨励賞「地球一輪」友利 正（ともり ただし）

昨年も奨励賞を受賞している。五句のうち四句は核の問題を扱い意識の高さを感じる。

《沖縄広島長崎忌の先に》。沖縄戦は人民を巻き込んだの地上戦であった。広島と長崎には原爆が落とされて瓦礫となった。悲惨な戦争の先に何があるか。何も残らないと平和を希求する。

《着膨れて鈕手草に核ボタン》。着膨れして衣服の鈕（ボタン）を手でもてあそんでいる。それと同じように人類は核のボタンを、もてあそんでいるのではないかと揶揄している

《地球一輪月一輪の劫初哉》。「地球一輪」「月一輪」と花に見立てているのが楽しい。「劫初」とはこの世の初め。初めは地球も月も一輪の美しい花であった。だが、今はどうだろうか。

奨励賞「蓮魂譜（れんこんぷ）」琴森 變（こともり れん）

作品五句とも「蓮」を入れてある。タイトル「蓮魂譜」に気持が込められている。すべての漢字の読み仮名が（ ）の中に入っている表記が気になる。選評では必要な漢字のみルビを打った。

《厨子甕に蓮花ひらく龜ゴウ祭》。遺骨を納める厨子甕に蓮の花の模様が掘られてあるのか。棺を龕に乗せて運び火葬し、骨を厨子甕に入れる。辺り一面の蓮の花が祈るように咲く。

《蓮根掘土の香に聴く地層かな》。蓮の根を掘っている。土の層が折り重なっている。その層のひとつひとつの土の香りから地層の声を聴いているのだろう。「香に聴く」の発想が良い。

《枯蓮や幻視の絵画ルドンなり》。枯れた蓮が水面一面に広がる。その景から存在しないものを

存在するかのように見せる、幻想的で神秘的な画風のフランスの画家、ルドンを連想したのか。

奨励賞「明鏡止水」 玉那覇 尚（たまなは なお）

十五歳の高校生。感性豊かに情景をよく捉え、季語もよく勉強している。先が楽しみだ。

《花篝魚影を纏う和船かな》。夜桜を鑑賞するため桜の木の下で焚かれる篝火が「花篝」。夜桜を眺める和船が通る。幻想的な花篝に照らされ、まるで魚影を纏うかのように過ぎるという。

《反橋の底の光織る緋鯉かな》。中央の高く弓状に反った橋の底を緋鯉が泳いでいる。高く反った橋から見ると、まるで光を織って纏っているかのような美しい色の緋鯉であった。

《爽籟の湖月に触れて柿揺るる》。さわやかな風の響きである「爽籟」に、湖水に映った月が揺れる。柿が揺れるのはそんな湖月に触れたからだという。風に揺れる柿を詩的に表現した句。

（おおしろ けん／俳人）

【琉歌部門】

波照間 永吉

今年は、応募総数は多くはなかった。それは高校生の応募がふえたことによる。しかし、一般の応募は例年にくらべると少なく、なお、応募者増加への取り組みの道半ばであることを思い知らされた。

全体の評価から先に言うと、一般の作者の力量は安定していた。一方、高校生の作品は、残念ながら、まだまだである。琉歌というものがどのようなものかというところからの学び直しを期待したいと思う。ただ、多くの高校生が琉歌にチャレンジしてくれたことはうれしく、この中からいずれ、すばらしい琉歌を生み出してくれる人が出てくれるものと期待したい。

さて、このような中で、よく安定し、歌の姿・内容とも優れていたのは1番の作者の作品であった。「^{すり}過れし^{うむかし}面影」と題された五首は、沖縄戦とその後の人生がテーマとなっている、一首目で沖縄戦で斃れた人々の御霊を弔い平和を祈る心を歌い、二首目で戦の酷さを歌う、そして三首目で、そのような大きな悲しみをもたらす戦争が今なお世界のあちこちで起こり続けていることを言い、平和を真に祈る心を歌う。三首目は沖縄戦を辛くも生き延びた自らの来し方を振り返り、自らと世界の将来を祝福する心を歌う。五首目で表題となっている、宇宙の星に「^{すり}過れし^{うむかし}面影」を見ることを歌うが、これは戦争の酷さと平和の尊さを感じる著者の祈りの心の表白といえる。いずれの歌も格調高く、作者の力量の確かさを充分に伝える一連である。

優秀賞には3番と31番の作者の歌が選ばれた。まず、3番の作者の作品からふれる。この応募作は無題の五首であるが、自らの「斗搔ち」（米寿）祝いを歌ったものである。最初の二首が自身の米寿そのものよりも平和を祈ることを歌っているところに、この作者の人生が偲ばれた。三首目はトーカチ祝いの座の喜びを歌い、四首目・五首目で華やかな宴の後に一人月を眺めることを歌うが、祝い座の賑わいから解放されて、ひとり満ち足りた思いで来し方を振り返る気持ちがよく出ている。ただ、四首目と五首目が同内容の繰り返しとなったところが惜しまれる。

31番の作品も無題である。日々、胸の中に去来する思いを歌った五首であるが、四季折々の気持ちを書いた歌であろうか。一首目は鳳仙花の花を見てあの世へ旅立った両親を思うという歌である。わらべ歌「ていんさぐぬはな」が作者の心で歌われていたことだろう。そして、二首目は命の限りを鳴き尽くす蟬の声を聞くことが歌われるが、結句の「思い新た」がよく作者の気持ちを表していて良いと思う。三首目は夜明け前の星空を仰ぎ、新しい一日をよく生きようとの作者の前向きな気持ちが表明されている。そして、四首目でミーニシ（初秋風）が吹くと両親のことが思われ、その愛情に満ちた言葉が思い出されると歌う。そして、五首目で、遠く海を隔てた故郷で自分を育んだ親と、共に育った友垣の姿を偲ぶと歌っている。一首目の第三句がそのまま読むと字余りになる。少し工夫が必要であったかと思う。

応募作品2番の方の作品も面白かったが、惜しいことに音数律からはずれたところが一、二あり、これが気になった。それから、高校生の作品にも一言触れると、是非、ウチナーグチ（シマクトウバ）を学んで、そのシマクトウバで自分の気持ちを存分に読み込んで欲しい。まずは、身

近なお年寄りと接しシマクトウバのシャワーを浴びてみてはどうだろうか。来年にはしっかりと琉歌で応募してくれることを期待している。

（はてるま えいきち／名桜大学 特任教授）

【琉歌部門】

照屋 理

琉歌部門は今年度、三七件（六五首）のご投稿をいただき、最優秀一作品、奨励賞三作品が選出された。以下に作品と選評結果を示す（本文、ルビは投稿原稿通りに表記した）。

・最優秀作品タイトル「^す過れし^{うむがじ}面影」（五首一組）

うちないくさば ^{みたまとうむらい}
沖縄戦場の御霊弔ひや平和世とつなぐ心さらめ

なみだくいとたいていあわりなちあ ^う
涙声よ立てて哀れ泣き明かす思まぬ死に別れ百の苦つさ

みたりありはてい ^{なまぬゆぬ}
乱れ荒れ果てる今の世の中に真肝願かける世界の平和

やそじく ^{ふにぬともぬかたみり}
八十路越す舟の鱸の方見れば潮花咲きほこる船路こころ

きわみはていし ^{ぬすら}
極め果て知らぬ宇宙に照る星に過れし面影よ語る今宵

戦場となった沖縄に眠る御霊を弔い、戦後八〇年を過ぎても癒えぬ悲しみを綴る。そして、ふたたび不安定となった世界情勢の現在について心からの平和を願い、自らの来し方を振り返りつつ、面影となってしまった方との語らいをうたう。ヴァリエーションに富む内容で何度も読み返したくなる。日々われわれは誰かと話題を共有し自他の存在を確認し合う。作者が語り合いたいのは、タイトルにある今は面影の方なのだろうか。

・奨励賞作品―「(無題)」(五首一組)

斗搔^{とうかち}ゆ迎^んけるゆかる日ぬ御座^{うざ}に解^すでて御真人^{うまんちゆ}と平和御願^{うにげ}げ

米^{ゆに}ぬ年^{としん}迎^んけいゆかる日に皆^{みな}と平和願^にげ上^くぎら言葉^{ことば}繋^なじ

斗搔^うぬ御祝^{ゆえ}親族^{しんかく}うち揃^すりて御座^{うざ}照^{てい}らち世界^{ゆが}報^{ほう}踊^うい華^はち

十五^{じゅうご}夜^やぬ月^{つき}ん照^{てい}りまさる今宵^{こんゆう}斗搔^うぬ御祝^{ゆえ}済^{さい}まち眺^{おん}み

今宵^{こんゆう}十五^{じゅうご}夜^やぬゆかる日ぬ月や斗搔^うゆ済^{さい}まち眺^{おん}みぢゆらさ

斗搔（とうかち）とは米を量る際に用いる道具で、現在米寿と呼ばれる八十八歳の生年祝いのことをも言う。琉球文化圏には、トーカチヌウユエー（首里）、トーカキヌヨイ（石垣）、クミサヌヨイ（宮古）、トーカキヨイ（奄美）などの方言呼称もある。それぞれ斗搔きのお祝いはどの意であり、九州地方にも同様の呼称が広く見られる。親族友人に祝われる人生の大幸を何度も噛みしめる作者の様子がうかがわれる。

・奨励賞作品2「（無題）」（五首一組）

まりまりに出合^いるてんさぐぬ花にニライカナイぬ親ゆ^{しぬ}偲^{おも}ふ

太陽落^てて後^あん鳴^なちゆるぜんぜんに限り^かある命^{ぬち}と思い新^{あたら}た

明^{あき}き方^{かた}ぬ空^{すう}ぬ星^{ほし}ゆ見^み上^あぎりば佳^よかる日^ひになさな我^わ身^みに語^{かた}る

新^{あたら}北^{きた}風^{ふう}ぬ吹^ふきばぬがなあながちさ両^{ふた}親^{つや}ぬ言^{こと}葉^は肝^{かん}に浮^うかぶ

渡^わ海^{かい}や隔^へみていん生^{せい}まり島^{しま}やりば親^{おや}ぬ面^{おも}影^{かげ}とう友^{とも}ぬ姿^{すがた}

本作品群は、「てんさぐぬ花」（ホウセンカ）と行き会い両親を偲ぶ一首からはじまる。ティンサグの花は琉球文化圏に留まらず、移民先でも愛唱される教訓歌を思い起こさせる。歌は、親から子への数えきれないほどの言寄せを歌い、子はそれらの寄せ言を肝に染めなさい、と歌う。肝に染められた寄せ言は、四首目の「両親の言葉肝に浮かぶ」の歌詞のように、子である存在を時に包むのであろう。

・奨励賞作品3「（無題）」（五首一組）

枕よ並びやに語る人居らむ思里の匂袖に残て

村の守り神旗頭清らしや細工師の技よ空に立たさ

初めての椿くくむいや沢山咲き誇てたばうれ果報寄せら

旅立ちやる里の誕生日だいのクーガフワーフワー作て里と食まな

十五夜の月の照りわたる夜にバス降れてみれば月の待ち

里とは琉球語で男性の称であり、思里とは女性が思いを寄せる男性の意である。一晚中語り明かした思里は、移り香を残し今はもういない。思里は旗頭を作る技巧を持つティーングマーでもあったのだろう。ツバキに挑戦しつつカファーを待ち、十五夜の月に迎えてもらいながら、思里の誕生日には好物であった「クーガファーフアー」（卵焼き）を一緒に食べる。作者の尽きることのない愛情は、これからも思里へ永遠に注がれていく。

以上が、最優秀一首および奨励賞三首の評である。

今回、投稿数が例年より多く、特に若手の作品はこれまでに最も多くの投稿があった。しかし八六調の音数律が守られておらず、方言の表現なども違和感がある作品が大半であり、若い感性を写しとった興味深い作品もあつただけに残念であつた。八六調は、単なる音のルールではなく、七五調と一線を画す琉歌の存在そのものでもある。字余り、字足らずだけでも意識されたい。

今回投稿された六五首に「平和」や「和」という語がかなり見受けられた。授賞作品中にも歌い込まれている。昨年同様いまだ世界で戦火は止まず、むしろ広がつつある。作者らとともに沖縄・名桜から平和を乞い求めたい。

（てるや まこと／名桜大学国際学部 教授）

第六回（令和七年度） 名桜文学賞表彰式を開催

令和八年三月十四日（土）、本学附属図書館東江康治記念講堂において、第六回（令和七年度）名桜文学賞表彰式を開催しました。

「名桜文学賞」は第十五回まで続いていた「名桜大学懸賞作品コンクール」を名称変更し、第六回目を迎える今回は六部門（小説、詩、短歌、エッセイ、俳句、琉歌）で応募総数一四九編の作品が寄せられ、その中から厳正な審査の結果、各部門の受賞作（最優秀賞…五作品、奨励賞…一四作品）が選ばれました。表彰式当日は、受賞者をはじめとする関係者を含め、約二十五人が参加しました。

表彰式に先立ち小番達館長から開会の挨拶があり、次に出席した審査員全員から講評が行われました。その後、参加した受賞者一人

ひとりに賞状及び副賞を授与しました。

表彰式終了後には審査員と受賞者が意見交換等を行う場面も見られ、創作への思いや今後の展望について活発な対話が行われ、会場は終始あたたかな雰囲気になりました。

また、審査員の講評に感動したという声も多く寄せられ、名桜文学賞が、文学を志す方々にとつて学びや成長の場となることを改めて実感するひとときでした。

今後も名桜文学賞は、文学の発展と才能の発掘に努め、さらなる創造と交流の場として発展していくことを目指してまいります。ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



名桜文学賞 表彰式を終えて。参加者一同

第六回名桜文学賞受賞作品集

(名桜大学附属図書館報 特別号 令和七年度)

発行日

令和八年三月三十一日

編集 名桜大学附属図書館

発行 公立大学法人名桜大学

〒九〇五-1858

沖縄県名護市字為又1-2-1

印刷

株式会社 国際印刷

名桜大学附属図書館報 特別号 令和7年度

